早稲田大学図書館所蔵

佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

瀧山　嵐

緒言

早稲田大学図書館所蔵、佐佐木忠慧氏（一九三一～二〇〇七）旧蔵資料の中に『秋蛇藏』の固有名を有する古筆手鑑が一帖存する（請求番号　イ四－三一六四－一八〇。以下「当該手鑑」と略す）。古筆手鑑とは、奈良時代から室町・南北朝時代頃までに肉筆で書かれた書物を主に筆跡の鑑賞を目的として切断・分割した「古筆切」（あるいは「断簡」「切」とも）が貼り込まれている断片資料のアルバムのことである。「古筆」は古い書跡を意味し、「手鑑」の「手」は筆跡、「鑑」は手本・見本を意味する。古筆手鑑は、安土桃山時代には製作されていたとされる。江戸時代初期に至り、古筆切の蒐集や茶席で掛物に仕立てた古筆切を愛翫することが盛行し、古筆切を愛好する機運が高まり、鑑賞とともに数多の古筆切を貼り付けることが可能で保存にも適する古筆手鑑の製作が流行したのだろう。

代表的な古筆手鑑は、国宝指定の京都国立博物館所蔵『藻塩草』（二四二葉）、出光美術館所蔵『見ぬ世の友』（二二九葉）、MOA美術館所蔵『翰墨城』（三一一葉）、陽明文庫所蔵『大手鑑』上・下帖（三〇七葉）がある。他に重要文化財指定されている京都国立博物館所蔵『大手鑑』（八〇葉）、五島美術館所蔵『筆陣毫戦』（二五七葉、表に「筆陣」、裏に

「毫戦」）、大東急記念文庫所蔵『手鑑』（一三九葉）、三井記念美術館所蔵『たかまつ』（一八六葉）、金沢市中村記念美術館所蔵『手鑑』（一九四葉）、東京国立博物館所蔵『月臺』（七八葉）、前田育徳会所蔵『野邊のみどり』（二八葉）などがある。上記以外の各機関や個人蔵のものを含むと、日本国内に伝存する古筆手鑑の総数は多数存し、その大半が未紹介であることは想像に難くない。他方、古筆手鑑の所在は日本国内だけではなく、例えばアメリカのメトロポリタン美術館（The Metropolitan museum of Art）所蔵『藻鏡』、オレゴン大学ナイト図書館（Special Collections and University Archive, Knight Library）所蔵『〔無銘古筆手鑑〕』、イェール大学バイネキ稀覯本・手稿図書館（Yale Association of Japan Collection, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University）所蔵『手鑑帖』なども存し、高精細なデジタル画像も公開されている。[注1]

佐佐木氏旧蔵資料は、二〇一〇年にご令室、佐佐木美穂子氏のご意思により早稲田大学図書館に寄贈された。[注2] これら旧蔵資料には、「イ四－三一六四」の整理番号が付され、計二五六点の資料を数える。旧蔵資料全体の凡そ一〇〇点が古筆断簡資料であり、その内容は歌集・物語・経典・仏書・書状と多岐にわたり、「古筆・古筆切の研究は特殊なものではなく、国文学研究の基本」[注3]という氏の研究理念が旧蔵資料群からも看取される。旧蔵資料の全貌は、早稲田大学図書館特別資料室（松本智子氏担当）「早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵資料目録」（『早稲田大学図書館紀要』第六〇号、二〇一三年三月）として目録化されている。この目録に記載されている当該手鑑の書誌情報は下記の通りである。

180　古筆手鑑

写　一帖　三九・九×二五・四cm

伝聖武天皇筆切ほか古筆切一〇五点貼込　箱入　箱貼紙に「古筆手鑑　秋蛇藏」とあり　折本

当該手鑑は、佐佐木氏が後半生に蒐集してきた古筆資料に解説を加えた『国文学古筆の考察』（青簡舎、二〇一一年）でも未紹介であり、さらに前述の旧蔵資料目録の公開以降、当該手鑑の網羅的かつ個別的な調査・研究はおこなわれておらず、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」（https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）でもデジタル画像は未公開の状況である（二〇二二年一一月現在。なお現時点での旧蔵資料の公開点数は五点のみ）。

本稿では、当該手鑑所収の断簡一〇五葉について原本調査に基づく書誌情報の集成と部分的な考証の結果とを纏めることを目的とする。古筆断簡の調査・研究では、何よりも各断簡のツレ（元々は同じ書物の断簡同士）を多く集成することが、裁断・分割前の書物の装訂や本文の性格を分析する上で重要であるため、当該手鑑のように未紹介の古筆断簡資料の情報公開は研究の更なる進展にも繋がる。

当該手鑑のデジタル画像は、本稿刊行後、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」で公開予定である。本稿との併用を願いたい。なお本稿では記述内容が大部となるため各断簡の個別・具体的な調査・研究の成果報告は割愛し、研究資料として刮目すべき断簡については本誌の次号以降、あるいは別稿にて報告する。

一　古筆手鑑『秋蛇藏』について

（一）当該手鑑の書誌情報

当該手鑑は、杉材の台輪付（だいわつき）被蓋（かぶせ）箱に収蔵されている。被蓋箱の法量は、蓋が縦四三・二×横二八・一×高さ七・〇cm、身が縦四一・八×横二七・一×高さ七・二cm。箱内底板右下部に「吉」と墨書されているが、詳細は不明である。蓋の表面右上部に「古筆手鑑　秋蛇藏」と墨書された貼紙（縦一二・九×横二・九cm）が付される。

当該手鑑の装訂は折帖（おりじょう）。法量は縦三九・八×横二五・二cm×高さ五・二cmである。所収断簡は、表面五三葉、裏面

五二葉の計一〇五葉。表紙は紺青地雲鶴文様で四周（約三・五cm幅）を紺青地蔓草文金襴の裂で縁取り、四隅に梅枝模様の角金具が施される（図版1）。手鑑表紙中央部に題簽の剥脱の痕跡があり、元々は銘を有していたと考えられる。表裏見返しは金箔布目地である。台紙は紙面に胡粉を塗布し雲母を引いた上質で厚手の紙である。古筆手鑑は屡々、所収断簡が貼り替えられることがあるが、当該手鑑は全体にわたり断簡の剥脱の痕跡等がみられないことからも、手鑑作成時の状態を保持して伝存していると判断できよう。

図版1　古筆手鑑『秋蛇藏』
（イ4-3164-180）

（二）所収断簡の排列

古筆手鑑に貼り付けられる古筆切は原則、筆者として伝えられる人物（伝称筆者）の身分や家柄別に排列される。[注4] 江戸時代初期には古筆切の流行や鑑定活動の需要が向上するにつれて古筆手鑑の摸刻本や古筆切を手鑑に貼り付ける順序を記載した書物が成立する。例えば慶安四年（一六五一）刊、称硯子編『御手鑑』（所謂「慶安手鑑」）は、手鑑所収断簡を原寸大で摸刻した大型の木版本であり、江戸時代初期の手鑑における断簡の排列の基準や順序を知ることができる。[注5]「慶安手鑑」巻頭は、伝聖武天皇と伝光明皇后の経断簡を排し、以降概ね身分や家柄別に分類され、江戸時代初期の古筆手鑑における排列意識についての知見が得られる。江戸時代初期以降、古筆切の蒐集や古筆鑑定の需要の高まりを背景に手鑑における筆者の順序を列記した書物は幾つも作成された。例えば笠原祥雨編『手鑑行列』は、上下二段（上段に表面・下段に裏面）で構成され、筆者七五〇名を身分・家柄等の基準で二二項目に分類する。[注6] その他、

古筆切の情報を集成した版本の類書は、文化元年（一七九九）刊『古筆名葉集』、安政五年（一八五八）序刊『増補古筆名葉集』（外題「新撰古筆名葉集」）、明治一八年（一八八五）序刊『増補古筆名葉集』等がある。[注7]

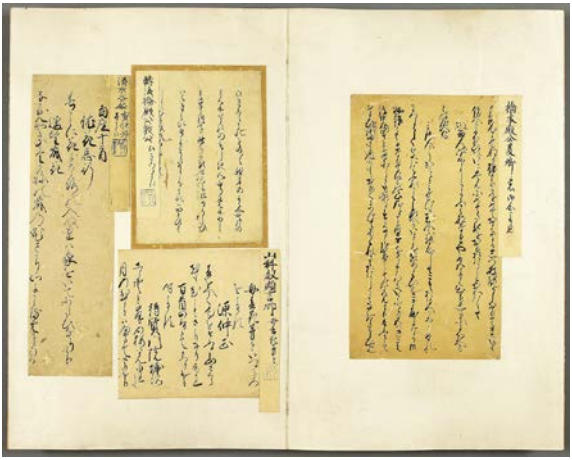
上記の写本・版本や伝存する古筆手鑑における伝称筆者は、通常、聖武天皇と光明皇后を筆者として伝える経断簡をはじめとして天皇（勅筆）、親王、鎌倉時代中期に成立した公家、御子左家、能書、世尊寺家、法親王、門跡、高僧・歌僧、武家、連歌師、書家等に大別・分類され、高位から順に排列される。さらに、これら分類された身分・家柄の各グループ内では複数の筆者を時代順に排列する。つまり古筆手鑑の排列とは、身分・家柄の分類に基づく各グループと、それらグループ内における時代順の排列との主に二つの基準で構成されていると言えよう。

では当該手鑑所収の古筆切の排列について確認する。表面は聖武天皇・光明皇后の経断簡から始まる勅筆（一～五）、親王（六～八）、法親王・門跡（九～一三）、公家（一四～四九）、書家（入木道の家系・能書家、五〇～五三）と続いていく。多数を占める公家は、平安時代末期から室町時代にかけて官職や位階の昇進の次第が定まることで家格が形成され、各家の格式が固定化していった。公家の家柄には、摂家・清華家・大臣家・羽林家・名家・半家があり、各家系別に家格を有する。[注8] 当該手鑑における公家グループの排列（一四～四九）は概ね上記の分類に拠っているが、必ずしも高位から順に排列されているわけではない。

公家グループの最初の摂家は、近衛家（一四・一五）、九条家（一六・一七）と順序通りである。次に清華家は、藤原北家閑院流・西園寺家庶流の洞院家（一八）・同花山院流の大炊御門家（一九）・花山院家（二〇）と七清華の家が列記される。これらに続き本来であれば清華家に属する「三条公敦」（三一、藤原北家閑院流の転法輪三条家）が排されるべきだが、羽林家の「橋本公夏」（三二、藤原北家閑院流の橋本家）の断簡が存する。この家格の順序の乱れは、排列意識の希薄化などの影響ではなく、製作時の都合によると考えられる。すなわち当該手鑑表面一二丁ウラに貼り付けら

れた伝橋本公夏筆断簡の法量は、縦一三・三×横一三・六cmの四半本で台紙の中央に貼り付けられている（図版2）。当該手鑑おける四半本とやや大きめの桝形本の断簡は、台紙一面に対して一葉貼り付けるのが原則のようである。台紙一面に縦一五・四×横一一・四の伝三条公敦筆断簡を一葉貼り付けてしまうと、台紙の余白が際立ち、断簡とのバランスも悪くなる。とはいえ、同一台紙面に伝三条公敦筆断簡と伝橋本公夏筆断簡とを貼り付けることは、物理的に不可能である。したがって家の格式は前後するが、伝橋本公夏筆断簡を先に貼り付け、改丁して伝三条公敦筆断簡を貼り付けたと考えられる。なお、伝三条公敦筆断簡が貼り付けられている表面一三丁オモテには、計三葉の断簡が貼り付けられており、一見すると窮屈な印象を持つ。二葉は小振りな桝形本（あるいは横本）サイズで、もう一葉は横の法量が短く縦に細長い四半本サイズである。当該手鑑の中で台紙一面に断簡が三葉貼り付けられているのはこの箇所のみであり、本来は台紙一面に二葉を上限として貼り付けるのが基準であったと考えられそうである。

以降、三三から四九の公家グループは、羽林家一〇葉、名家四葉、半家一葉、清華家一葉（三六、村上源氏久我家庶流の堀川家は室町時代に絶家）、藤原北家中関白家一葉（四二）が貼り付けられており、飛鳥井雅綱（四五）と飛鳥井雅親（四六）の並列以外は貼り付け順序の法則を見出し難い。ただし、表面末尾では書家（入木道の家系・能書家、五〇〜



図版２　表12丁ウラ・表13丁オモテ

五三）の断簡が四葉排列されているため、公家グループ内の排列順序の個別的な事情にかかわらず、手鑑全体における身分・家柄によるグループ分類の構成は保持されている。

次に裏面の排列は、経典の断簡（五四・五五）、高僧・歌僧（五六～五九）、藤原為家をはじめとする御子左流のうち二条家（六四を除く六〇～七一）、冷泉家（御子左流）（七二・七三）、武将（七四～八二）、和歌四天王（八五・八六）、歌人・連歌師（八七～一〇五）のグループに大別されるが、（八〇）から（八四）は幾つか不自然な排列箇所が存する。一つは、伝仁和寺弘融（八三）と伝兼空（八四）の断簡の位置である。この二葉の断簡は和歌四天王（南北朝時代の歌人である頓阿・慶運・浄弁・兼好法師の四名）のグループの直前に位置する。まず兼空は『新撰古筆名葉集』に「頓阿門人」と説明される歌人であり、後続する和歌四天王グループの頓阿との関係性は指摘できよう。問題となるのが仁和寺弘融の位置である。以下稿者の推測となるが、仮に後続の和歌四天王グループとの関連で説明をするならば、弘融と兼好法師との関係性は指摘できよう。弘融は、『徒然草』第八二・八四段にそれぞれ「弘融僧都」として登場しており、兼好との関連が見出せる。ただしこの推測については傍証や判断材料とが乏しい。

いま一つは、室町時代中期の歌人・連歌師である桜井基佐（八〇）の位置である（図版3）。当該断簡は武将グループ（七四～八二）の中にあり、本来であれば後の歌人・連歌グループに排されるべきである。これも既に表面の考証で述べたように当該断簡の法量が関係しており、縦一二・一×横九・六cmとやや小振りの桝形の形態であることが関係している。台紙の面積を考慮すると、四半本と同紙面への貼り付けることは難儀であるため、縦の法量が短い桝形本の断簡

図版3　（八〇）伝桜井基佐筆断簡

と共に貼り付ける必要が生じたのだろう。表面の場合と同様に、当該手鑑の排列は、一定の貼り付け順序に則りつつも、貼り付ける断簡同士の物理的なバランスを考慮した手鑑製作時の都合によって部分的に変更が施されていると考えられる。

（三）古筆見の鑑定

江戸時代初期、古人の筆蹟資料（古筆）の鑑定を家職とする古筆家が成立する。その初代は古筆了佐（一五七二～一六六二）であり、本名を平澤弥四郎範佐という。了佐の伝記については依然として不明瞭なところもあるが、若年で上京し古筆鑑定をおこなっていた公家の近衛前久（一五三六～一六一二）と烏丸光広（一五七九～一六三八）から古筆鑑定の知見や技術を学んだとされる。了佐は古筆鑑定の技量を認められ、豊臣秀次（一五六八～一五九五）、あるいは江戸幕府から「古筆」の姓と鑑定に用いる「琴山」の印とを賜ったとされる。

古筆切の鑑定資料である「極札」とは、縦一三～一四×横二・〇cm程度の、やや厚手の紙で作成された短冊状の資料のことをいう。極札の表面には筆者名と本文の書き出し数文字とを記し（ただし了佐は本文の書き出しを記さないことが多い）、下部に鑑定印を捺す。対して裏面には鑑定した年月（年は干支で表記）が記され、私印・台帳への割印が捺される（裏面は無記載のこともある）。古筆手鑑所収の極札は、台紙に貼り付けられているため、表面の筆蹟や鑑定印、あるいは鑑定印の欠画の程度により鑑定者や鑑定年を推測することとなる。(注9)

さて当該手鑑には計一〇四枚の極札が附属している（ただし六三・六四番には極札は付属していない。九八番には二枚の極札が附属する）。鑑定家は計二〇名を数える。以下に鑑定者と極札の枚数とを列記する。古筆家初代了佐（一五七二～一六六二。四枚）、古筆本家二代了栄（一六〇七～一六七八。二枚）、五代了珉（一六四五～一七〇一。一枚）、六代了音

（一六七四～一七二五。一枚）、古筆別家二代了任（一六二九～一六七四。六枚）、三代了仲（一六五六～一七三六。三九枚）、古筆了雪（一六一二～一六七五。四枚）、末田幽磧（生没年未詳。四枚）、神田家三代道僖（一六三三～一七一一。三枚）、四代道伴（一六七八～一七四九。三枚）、二代畠山牛庵（一六二五～一六九三。四枚）、三代畠山牛庵（生没年未詳。三枚）、初代朝倉茂入（生没年未詳。九枚）、二代朝倉茂入（生没年未詳。三枚）、藤本了因（一六二六～一七〇四。四枚）、藤井常智（生没年未詳。四枚）、初代川勝宗久（生没年未詳。六枚）、二代川勝宗久（生没年未詳。二枚）、奥西宗円（生没年未詳。一枚）、その他不詳鑑定家一名である。全体の三割弱が古筆別家三代了仲の極札であり、未詳の極札を除き了仲の時代に先立つものと、同時代のものとが際立つのが特徴である。

【注】

（1）アメリカのメトロポリタン美術館（https://www.metmuseum.org/art/collection/search/65085?sortBy=Relevance&ft=Various+calligraphers&offset=0&rpp=40&pos=1）やオレゴン大学（https://glam.uoregon.edu/s/tekagami-kyogire/page/welcome）、イェール大学（https://tenthousandrooms.yale.edu/project/tekagami-jo-shou-jian-tie-project）でデジタル画像の閲覧が可能である（二〇二二年一一月現在）。

（2）早稲田大学図書館特別資料室（松本智子氏担当）「早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵資料目録」（『早稲田大学図書館紀要』第六〇号、二〇一三年三月）。

（3）佐佐木忠慧『国文学古筆の考察』（青簡舎、二〇一一年）の「序」。

（4）別府節子「出光美術館蔵　古筆手鑑『濱千鳥』について」（出光美術館編『出光美術館研究紀要』一四、二〇〇九年一月）は、古筆手鑑『濱千鳥』所収断簡の排列に関する詳細な分析をおこない、「表、裏ともに古筆切が非常に整然と配列されている」とし、とりわけ「公家のグループが体系的」と整理した。佐々木孝浩「断片の集積体―「古筆手鑑」という存在―」（国文学研

究資料館・コレージュ・ド・フランスに本学高等研究所編『集と断片　類聚と編纂の日本文化』勉誠出版、二〇一四年）は、国宝指定の所謂「三大手鑑」（京都国立博物館所蔵『藻塩草』・出光美術館所蔵『見ぬ世の友』・ＭＯＡ美術館所蔵『翰墨城』）を例に伝称筆者の排列について指摘する。

（5）早稲田大学図書館には『御手鑑』の版本が四点所蔵されている（請求番号　文庫三一－Ｅ七三三他。二〇二二年一一月現在）。増田孝・日比野浩信『慶安手鑑』（思文閣出版、二〇一七年）に解説・影印・釈文・索引が載る。

（6）享保五年（一七二〇）の藤原重秋の奥書本が静嘉堂文庫に所蔵されている。また、慶應義塾ミュージアム・コモンズ「Keio Object Hub」で享保七年（一七二二）書写本の一部がデジタル画像で確認できる（個人蔵。https://objecthub.keio.ac.jp/ja/object/13493　最終閲覧二〇二二年一一月）。本稿では『手鑑行列』の内容を有する西尾市岩瀬文庫所蔵『古筆名寄』を翻刻した、松本文子「【翻刻】西尾市岩瀬文庫所蔵『古筆名寄』」（『鶴見大学紀要』第一部　国語・国文学編、四四、二〇〇七年三月）を参照した。上記『古筆名寄』（扉題「古筆名寄」、内題「手鑑行列」）は、五部構成であり、順に『手鑑行列』（二丁オ～二六丁ウ）、『手鑑行列之事』（二四丁オ～二六丁オ）、『古筆極古筆庵畠山朝倉幷弟子等』（『手鑑行列之事』の周縁に書き入れ。二三丁ウ末尾～二六丁オ）、『古筆流分』（二七丁オ～四二丁ウ）、『定家卿小倉色紙二十七枚』（四三丁オ～四四丁ウ）、『古筆切目安　幷手鑑行列』が収録されている。

なお写本では静嘉堂文庫所蔵の古筆別家了仲著『古筆切名物』が四九三名もの筆者名と、各断簡の名称と特徴とを列記している。当該本は、武田則夫「翻刻「古筆切名物」」（『ＭＵＳＥＵＭ　東京国立博物館美術誌』二三六、一九七〇年一一月）に拠った。また、京都市歴史資料館所蔵『古筆名物切』（外題「古筆名物集」。請求番号　ＤＩＧ－ＫＴＲＳ－一三六）は、内題の下に「神田道伴自筆」とあり神田家四代当主道伴（一六七八～一七四九）が関与したと思しい資料である。当該本は計一九〇名の筆者名、及びその下部に各断簡の名称と特徴とを列記している資料である（末尾に「通計二百六十餘」と朱書きされるが切の種類を概算したものか）。なお同本は、他に慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に保管されている慶應義塾（センチュリー赤尾コレクション）に小松茂美旧蔵の『古筆名物切』（資料番号　ＢＫ－ＫＯＭ－〇〇〇〇六－〇〇〇〇）があり、注6の「Keio Object Hub」で一部がデジタル画像で確認できる（https://objecthub.keio.ac.jp/ja/object/13478　最終閲覧二〇二二年一一月）。及び『センチュリー赤尾コレクション×斯道文庫　書を極める　鑑定文化と古筆家の人々』（慶應義塾大学附属研究所斯道文

庫・慶應義塾ミュージアム・コモンズ、二〇二二年）にも図版掲載。

（7）早稲田大学図書館所蔵、安政五年（一八八五）刊『増補古筆名葉集』（外題「新撰古筆名葉集」。請求記号　文庫二〇－四三四）。なお下記も参照のため使用した。伊井春樹・大阪大学古代中世文学研究会編『新版　古筆名葉集』（和泉書院、一九八八年）。当該本には、『古筆家秘書』（内閣文庫蔵）、『古筆切目安』（静嘉堂文庫蔵）、『古筆名葉集』（文政一一年〈一八二一〉）、『増補新撰古筆名葉集』（安政五年〈一八五九〉）の四冊に記載される伝称筆者と切に関する情報が掲載されている。

（8）摂家は藤原氏北家のうち摂政・関白を極官とする家。清華家は摂家に次ぐ家格で大臣と大将を兼ねて太政大臣を前途する家。大臣家は大臣まで昇任可能で清華家と同様の昇進をする家。ただし欠員が生じた場合は直接内大臣に昇進する。羽林家は近衛少将・中将を経て大納言を前途する家。名家は弁官を経て大納言を前途する文官の家。半家は羽林家と名家との性格を伴った家で紀伝道・明経道・陰陽道などの特殊な家業や官職に携わる家。近衛少将・中将や弁官を経ない大納言を極官とするが、非参議に留まることも多い。

（9）古筆了栄の「琴山」印の欠画により鑑定時期を分析した、中村健太郎「古筆了栄の極札にみられる「琴山」印の経年変化と発行年次の特定について」（『書道学論集』一、二〇〇三年）を参照。他にも古筆家の鑑定活動に関する先行論として、同「極札における記載形式の時代的変遷について―古筆本家を中心として―」（『若木書法』三、二〇〇四年）、同「古筆別家の鑑定活動について」（『若木書法』四、二〇〇五年）等が参考になる。

【凡例】

一、本稿は、早稲田大学図書館所蔵、佐佐木忠慧氏旧蔵の古筆手鑑『秋蛇藏』（請求番号　イ四－三一六四－一八〇）所収断簡の書誌情報・本文の翻刻・出典を集成し一覧したものである。

一、第二節「所収断簡一覧」は、表面から順に通し番号を付し、丸括弧内に丁数と手鑑の表裏・伝称筆者・断簡の内容を記した。例えば、表面二丁オモテの断簡は、「四（表2オ）　後円融天皇　新古今和歌集」のように記した。

一、断簡の通し番号は、表面が一～五三、裏面が五四～一〇五である。

一、断簡の書写年代は、内容・紙質・書流・書体、及び各断簡のツレに関する先行研究等から総合的に推測し、時代区分を記した。ただし「前期・中期・後期」の判断が難儀な場合は時代区分のみを暫定的に記した。

一、極札は、表面の筆蹟や鑑定印から鑑定者を判断し丸括弧内に記した。鑑定者や鑑定印が不明の場合、適宜「鑑定者不詳」「印文不読」と記した。極札の分析は主に下記の資料を参照した。村上翠亭・高城弘一・松村一徳・小林強・中村健太郎『古筆鑑定必携　古筆切と極札』（淡交社、二〇〇四年）。

一、料紙の材質は、雁皮を原料として漉かれた紙は「斐紙」、楮を原料として漉かれた紙は「楮紙」、雁皮と楮とを混ぜて漉かれたと判断できる紙は「斐楮交漉紙」、苧麻などを原料として漉かれた紙は「麻紙」と記した。その他の装飾料紙等は、例えば漉き染めを部分的に施す「打雲」（雲紙）や「飛雲」、金銀箔を用いた「切箔」「砂子」「揉箔」、金銀泥の図柄や文様の「描き絵」等は適宜、記した。また料紙分析の際、宍倉佐敏編著『必携　古典籍・古文書料紙事典』（八木書店、二〇一一年）を参照した。

一、断簡の書誌は、原本調査の結果に基づいて、料紙の材質・紙面の縦横の法量・字高（「字面高さ」とも。本文一行の最上部から最下部までの法量の平均値。なお経断簡などは界高・界幅）を記した。

一、本文の欠損文字・判読不能文字は「□」で示した。視認は可能だが判読難儀な文字、及び他の断簡や極札と重なり判読不能だが推測可能なものは「□」内に翻字を示した。

一、本文の翻字は、可能な限り原本に忠実におこなったが、一部現行の字体に改めた箇所もある。また、本文中の記号（合点・声点・見せ消ち）、注記（出典・校異・訂正・補入・訓点・評語等）等はできる限り忠実に翻字したが、紙面の都合で一部省略した箇所がある。その場合は「備考」欄に注記・記号の有無を記した。

一、出典は、歌切の歌番号は原則として『新編国歌大観』、経切は大正新脩大蔵経テキストデータベース（https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/）を、仮名散文切は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『源氏物語』は池田亀鑑編著『源氏物語大成』等を参看した。また、各断簡のツレの調査では国文学研究資料館「古筆切所収情報データベース」（http://base1.nijl.ac.jp/~kohitu/）を主に使用した。

二　所収断簡一覧

一（表1オ）　聖武天皇　妙法蓮華経
二（表1オ）　光明皇后　金光明最勝王経
三（表1ウ）　後光厳天皇　臨永和歌集
四（表2オ）　後円融天皇　新古今和歌集
五（表2ウ）　後花園天皇　源氏小鏡
六（表3オ）　後崇光院　未詳歌集
七（表3ウ）　尊良親王　和漢朗詠集（丹後切）
八（表3ウ）　八条宮智仁親王　短冊
九（表4オ）　青蓮院慈道法親王　未詳仏書
一〇（表4オ）　青蓮院尊伝親王　短冊
一一（表4ウ）　青蓮院尊純法親王　源氏物語
一二（表5オ）　聖護院道勝　古今和歌集
一三（表5オ）　聖護院道応親王　自讃歌
一四（表5ウ）　梶井宮尭胤法親王　水無瀬恋十五首歌合
一五（表6オ）　梶井宮彦胤法親王　古今和歌集
一六（表6ウ）　梶井宮応胤入道親王（蜻庵）　古歌短冊
一七（表6ウ）　知恩院良純親王　新古今和歌集
一八（表7オ）　曼殊院慈運親王　亜槐集
一九（表7ウ）　聖護院道増　百人一首
二〇（表8オ）　一乗院覚誉　古今和歌集
二一（表8ウ）　定法寺公助　老葉
二二（表8ウ）　一乗院良定　色紙
二三（表9オ）　一乗院良誉　未詳歌集
二四（表9ウ）　近衛尚通　藤川五百首
二五（表10オ）　近衛前久（龍山）　書状
二六（表10ウ）　九条教家　弥勒講式
二七（表11オ）　九条稙通　続草庵集
二八（表11ウ）　洞院公賢　和漢朗詠集
二九（表12オ）　大炊御門経光　古歌短冊
三〇（表12オ）　花山院定誠　古歌短冊
三一（表12ウ）　橋本公夏　源氏物語
三二（表13オ）　三条公敦　源氏物語
三三（表13オ）　山科顕言　千載和歌集
三四（表13オ）　清水谷実秋　拾玉集
三五（表13ウ）　小倉実起　色紙
三六（表14オ）　堀川具世　新古今和歌集
三七（表14ウ）　清水谷実久　伊勢物語
三八（表15オ）　万里小路惟房　未詳経句題
三九（表15ウ）　甘露寺元長　歌枕名寄
四〇（表16オ）　中山宣親　新古今和歌集
四一（表16ウ）　富小路資直　拾遺和歌集
四二（表17オ）　藤原長房　自讃歌
四三（表17ウ）　日野勝光　古今和歌集
四四（表18オ）　水無瀬兼成　拾遺和歌集
四五（表18ウ）　飛鳥井雅綱　後撰和歌集
四六（表19オ）　飛鳥井雅親　千載和歌集
四七（表19ウ）　六条有純　古歌短冊
四八（表19ウ）　中御門宣胤　拾玉集
四九（表20オ）　久世通音　短冊
五〇（表20オ）　世尊寺行能　新古今和歌集
五一（表20ウ）　世尊寺行尹　後撰和歌集
五二（表21オ）　藤原行成　妙法蓮華経

五三（表21オ）小野道風
五四（裏1オ）朝野魚養
五五（裏1オ）明恵上人
五六（裏1ウ）俊寛
五七（裏2オ）寂蓮
五八（裏2オ）本願寺実如
五九（裏2ウ）慈鎮和尚
六〇（裏3オ）藤原為家
六一（裏3ウ）二条為氏
六二（裏4オ）二条為世
六三（裏4ウ）定為
六四（裏5オ）古筆了佐
六五（裏5ウ）二条為定
六六（裏6オ）二条為親
六七（裏6ウ）二条為明
六八（裏6ウ）二条為忠
六九（裏7オ）二条為重
七〇（裏7ウ）二条為右
七一（裏8オ）覚源
七二（裏8ウ）冷泉為相
七三（裏9オ）冷泉為秀
七四（裏9ウ）藤原秀能
七五（裏10オ）足利義視
七六（裏10ウ）今川了俊
七七（裏10ウ）北条氏政
七八（裏11オ）飯尾常房
七九（裏11ウ）池田正能

妙法蓮華経
大方広華厳経
大般涅槃経
古今和歌集
古今和歌集
未詳仏書
定家八代抄
拾遺抄
新古今和歌集
拾遺和歌集
新勅撰和歌集
奥書極
古今和歌集
古今和歌集
物語二百番歌合
拾遺和歌集
和漢朗詠集
新後拾遺和歌集
雲葉和歌集
後拾遺和歌集
千載和歌集
古今和歌集
歌枕名寄
未詳歌集
古歌短冊
色紙
竹林抄

八〇（裏11ウ）桜井基佐
八一（裏12オ）楠長諳
八二（裏12オ）蜷川親当
八三（裏12ウ）仁和寺弘融
八四（裏13オ）兼空
八五（裏13ウ）浄弁
八六（裏14オ）頓阿
八七（裏14ウ）尭孝
八八（裏15オ）円雅
八九（裏15ウ）周興
九〇（裏16オ）正徹
九一（裏16ウ）正般
九二（裏17オ）漸空上人
九三（裏17ウ）素眼
九四（裏17ウ）六角堂専順
九五（裏18オ）細見宗高
九六（裏18ウ）庭田雅秀
九七（裏19オ）寿慶
九八（裏19オ）周桂
九九（裏19ウ）宗硯
一〇〇（裏19ウ）宗椿
一〇一（裏20オ）宗養
一〇二（裏20オ）梅軒宗句
一〇三（裏20ウ）猪苗代兼与
一〇四（裏20ウ）北野松梅院
一〇五（裏21オ）秋葉工庵

未詳歌集
長恨歌
古歌短冊
後撰和歌集
後拾遺和歌集
古今和歌集
古今和歌集
新続古今和歌集（仏光寺切）
新古今和歌集
新続古今和歌集
新古今和歌集
色紙
倭名類聚抄
古歌短冊
表佐千句
源氏物語注釈
未詳歌集
老葉注
月村抜句
源氏物語和歌抄出
短冊
未詳歌集
短冊
短冊
古今和歌集

三　所収断簡の書誌情報・本文一覧

一　伝聖武天皇筆（しょうむてんのう）『妙法蓮華経』断簡

【書写年代】奈良時代

【極札】「聖武天皇尓時仏（審定／眞蹟・朱）」（鑑定者不詳）

【書誌】斐紙墨書　縦二六・九×横一〇・五cm。界高二一・八、界幅二・一cm。

【本文】

尓時仏告羅睺羅汝於来世当得作仏号蹈七宝華如来応供正遍知明行足善逝世間

【出典】『妙法蓮華経』巻第四

二　伝光明皇后筆（こうみょうこうごう）『金光明最勝王経』断簡

【書写年代】平安時代

【極札】「光明皇后宝豊足（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・六×横八・一cm。界高一九・四、界幅一・五cm。

【本文】

宝豊（フ）足受用不相侵奪（シムタツ）随彼宿因而受其報不起悪念貪求他国咸生少欲利楽之心無

【出典】『金光明最勝王経』巻第六

【備考】朱点・書き入れあり。

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

三　伝後光厳天皇筆（ごこうごんてんのう）『臨永和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】極札「後光厳院吹風に（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二三・七×横一五・二cm。字高、約二〇・一cm。

【本文】

時雨を

祝部成久宿祢

吹風に山の葉こえてゆく雲のやすらふほともなきしくれかな

平範貞

山かせもけさはけしくふきかへて時雨をいそくうき雲の空

梯時雨

平貞宗

かせはやみ山の里は時雨にて雲のうへなる峯のかけはし

文保百首哥たてまつりける時

前参議雅孝卿

【出典】『臨永和歌集』巻第四・冬歌・二三六～二三八

四　伝後円融天皇筆（ごえんゆうてんのう）『新古今和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代末期

【極札】「後圓融院あはれとみ（「隨道」・朱瓢型印）」（三代畠山牛庵）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・四×横一四・四cm。字高、約一八・二cm。

【本文】

あはれとみすやかものみつかき

ひろはたのみやすところにつか

はしける　天暦御哥

逢ことをはつかにみえし月影の

おほろけにやはあはれともおもふ

題しらす　伊勢

さらしなやおはすて山のあり明の

つきすもものをおもふ頃かな

【出典】『新古今和歌集』巻第十四・恋歌四・一二五五～一二五七

五　伝後花園天皇筆　『源氏小鏡』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「後花園院〳〵（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二二・五×横一七・一cm。字高、約二〇・五cm。

【本文】

〳〵御らんするにみやこより御むかへにとふの
ちうしやうさちうへんなとまいりてとうのちう
しやうはふえをふきさちうへんはあふきう
ちたゝきとよらのてらのにしなれやなとゝ
うたいなしていとおもしろけれは御ともの人
〳〵にし山なにかしのたけすまあかしのもの
かたりをいひいたしたるそのときあかし
のうへの事をもきゝそめ給ふ又むらさきの
うへ二てうのゐんへむかへ給ひしときあさひ
いろのきぬをきせ給ふ九月にはきみにお
くれ給ひて十月けんしのむかへ給ふ

【出典】『源氏小鏡』「若紫」巻

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

六　伝後崇光院（伏見宮貞成親王）筆　未詳歌集断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「後崇光院人しれす（「牛菴」・朱瓢型印）」（二代畠山牛庵）

【書誌】斐紙墨書　縦二八・〇×横一三・六cm。字高、約二三・二cm。

【本文】

人しれすあつめし雪も時しらて老て世にふる身をいかにせん
　　太上法王
君か世にあらすはなにと老らくのうき身にたのむ命にはせん
　　普広院よませられし中に
世の人の仰にやゆてたのむかな君の想はひとのならぬと
　　述懐依人　　よみ人しらす
うしとても世をも人をともうらみしに数ならぬ身はあるにまかせて

【出典】未詳歌集

七　伝尊良親王（たかよししんのう）筆　『和漢朗詠集』断簡（丹後切）

【書写年代】鎌倉時代末期～南北朝時代初期

【極札】「尊良親王（後醍醐帝一宮　昨日山中之）（「養心」・黒方印）」（三代神田道僖）

【書誌】斐紙墨書　縦三一・三×横六・五cm。字高、約二五・一cm。界高二五・六、界幅三・一cm。

【本文】

昨日山中之木材取於己今日庭前
之花詞慙於人

【出典】『和漢朗詠集』巻下・文詞［付随文］・篤茂・四七四。

【備考】朱書入れあり。

八　伝八条宮智仁親王（はちじょうのみやとしひとしんのう）筆　短冊

【書写年代】江戸時代前期

【極札】「宮智仁親王（いつもきく）（「養心」・黒方印）」（三代神田道僖）

【書誌】斐紙（上方金銀砂子菱形文様・下方金砂子銀切箔・中間金泥鶴下絵）墨書　縦三六・六×横五・八cm。界線二五・四、界幅三・一cm。

【本文】

いつもきく鐘の声かは所かく
ちるもえならぬ花の木□　色

【出典】未詳歌

【備考】「木□」の箇所、銀切箔に文字が重なり不読。

九　伝青蓮院慈道法親王筆　未詳仏書断簡

【書写年代】鎌倉時代

【極札】「青蓮院殿慈道法親王（「幽碩」・黒方印）」（末田幽碩）

【書誌】楮紙墨書　縦三〇・〇×横六・五cm。界高二五・四、界幅三・一cm。

【本文】

不生不滅潅頂輪伽無导自在憶彼
理趣同此秘密初肖不生之梵音即是

【出典】「不生～自在」までが空海『理趣経開題』と一致する。「憶彼」以下、未詳。

【備考】朱墨の書き入れあり。

一〇　伝青蓮院尊伝親王筆　短冊

【書写年代】室町時代

【極札】「冒蓮院殿尊傳親王名も高き（「極」・黒方印）」（初代川勝宗久）

【書誌】斐紙（天藍地紫金鳥銀草花下絵）墨書　縦三四・二×横四・九cm。字高、約二四・五cm。

【本文】

名も高き吉野の山もいかはかり
かへるおもひの花にせかれて

【出典】未詳歌

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

一一　伝青蓮院尊純法親王筆　『源氏物語』断簡

【書写年代】江戸時代前期

【極札】「青蓮院尊純親王花その、（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・七×横一七・四cm。字高、約二一・八cm。

【本文】

花そのゝこてうをさへや下草に秋まつ
むしはうとくみるらん宮かの紅葉の御かへ
り成けりとほをゑみて御らんす昨日の女
房たちもけに花の色はえをとさせ給ま
しかりけりとはなにおれつゝきこえあへり
うくひすのうらゝかなるねに鳥のかく
はなやかにきゝわたされて池の水鳥も

【出典】『源氏物語』「胡蝶」巻。池田亀鑑編著『源氏物語大成校異篇』七八六頁七～一〇行目。

一二　伝聖護院道勝筆　『古今和歌集』断簡

【書写年代】江戸時代

【極札】「聖護院殿道勝木の間より（※印文不読・黒方印）」（二代朝倉茂入）

【書誌】斐紙（金銀泥雲霞銀砂子）墨書　縦三六・六×横五・三cm。字高、約二七・〇cm。

【本文】

木の間よりもりくる月の影みれは
こゝろつくしの秋はきにけり

【出典】『古今和歌集』巻第四・秋歌上・一八四

一三　伝聖護院道応親王筆　『自讃歌』断簡

【書写年代】室町時代中期

【極札】「聖護院道應親王（おも影の）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二五・〇×横一一・一cm。字高、約二三・五cm。裏書きあり。

【本文】

おも影の霞める月そやとりける春やむかしの袖のなみたに
あたにちる露のまくらにふしわひてうつらなくなり床の山かせ
色かはる露をは袖にをきまよひうらかれてゆく野への秋かせ
露かれはそこともみえす（ぬイ）草のはら誰にとはまし秋の名残を
いにしへの秋の空まてすみた河月にこと、ふそての露かな
おしめとも（むイ）涙に月は心（もイ）からなれぬる袖に秋をうらみて

【出典】『自讃歌』俊成女・七二～七六・七八。「おも影の」七二番歌、「あたにちる」七三番歌、「色かはる」七六番歌、「露かれは」七八番歌、「いにしへの」七四番歌、「おしめとも」七五番歌。

一四　伝梶井宮尭胤法親王筆　『水無瀬恋十五首歌合』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「梶井尭胤親王（明るまを）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】楮紙墨書　縦二四・一×横一五・五cm。字高、約二三・六cm。

【本文】

右　　権中納言
明るまをなにうらみけむあふことの（名残にいまは恋しきものを）
左水のしら玉いまはとてといへるたゆむ
もしらぬなと心をかしく侍を右すゑの
句やすらかに侍へしよりて左の勝につけて
侍よしなるへし
廿六番　暮（クレ）ノ恋
左勝　　親定
いかにせむこぬ夜のあまたの袖の露に（月をのみまつ夕暮の空）

【出典】『水無瀬恋十五首歌合』二五～二六番、五〇・五一

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

一五　伝梶井宮彦胤法親王筆（かじいのみやげんいんほつしんのう）『古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「梶井彦胤法親王（るおりに）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・九五×横一五・五cm。字高、詞書、約一七・六cm、和歌、約二〇・九cm。

【本文】

るおりにしろきとりのはしとあしとあかき河
のほとりにあそひけり京には見えぬ
とりなりけれはみな人見しらすわたし
もりにこれはなにとりそととひけれは
これなむ宮ことりといひけるをきゝて
よめる
名にしおはゝいつことゝはむ都鳥わか思人は有やなしやと
題しらす　　よみ人しらす

【出典】『古今和歌集』巻第九・羈旅歌・四一一・在原業平

一六　伝梶井宮応胤入道親王（蜻庵）（かじいのみやおういんにゅうどうしんのう　せいあん）筆　古歌短冊

【書写年代】室町時代

【極札】「梶井殿蜻菴（琴山・黒方印）」（古筆家初代了佐）

【書誌】斐紙墨書　縦三六・四×横五・三cm。字高、約一七・八cm。

【本文】

松雪　わかやとはけふふる雪にうつもれて
まつたにかせの音信もせす

【出典】道助法親王家五十首。『万代和歌集』巻第六・冬歌・一四六三。『続後撰和歌集』巻第八・冬歌・五〇九。上記歌集では、「けふ」が「けさ」とある。

一七　伝知恩院良純親王筆『新古今和歌集』断簡

【書写年代】江戸時代前期

【極札】「知恩院良純法親王空は猶（「隨道」・朱瓢型印）」（三代畠山牛庵）

【書誌】斐紙墨書　縦一七・三×横一四・四cm。字高、約一四・七cm。

【本文】

摂政太政大臣

空は猶霞もやらす風さえて雪けに曇る春の夜の月

和歌所にて春山月といふ心よめる

越前

山ふかみなを影さむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

詩をつくらせて哥にあはせ侍りしに水郷春望

といふことを　左衛門督通光

みしま江や霜もまたひぬあしのはにつのくむ程の春風そ吹

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわか葉をこゆる白浪

【出典】『新古今和歌集』巻一・春歌上・一三一～一二六

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

一八　伝曼殊院慈運親王筆『亜槐集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「曼殊院慈運親王くるゝまて（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二五・四×横一五・九cm。字高、約二二・五cm。

【本文】

薄似袖

くるゝまてまねく尾花の袖みえてをちかた野へは行人もなし

苅萱

百草もませゆふ庭もかるかやは葉にをく露そ猶みたれける

槿

夜もすから露にむもれてねくたれの花の槿あかぬ色かな

籬槿

花みんとおもはぬしはの籬をもうつむ計にかゝるあさかほ

戸外槿

松の戸のときはの影はしはし猶朝日かくれに残る朝かほ

【出典】『亜槐集』巻第五・五七〇～五七四

一九　伝聖護院道増筆（しようごいんどうぞう）『百人一首』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「聖護院殿道増准三后（君かため）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二六・〇×横一七・二cm。字高、約二二・二cm。

【本文】

君かためおしからさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな
　藤原実方朝臣
かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを
　藤原通信朝臣
明ぬれはくる、物とはしりながら猶うらめしき朝朗かな
　右大将道綱母
歎つ、独ぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしる
　儀同三司母
忘しの行末まてはかたけれは今日を限の命ともかな
　大納言公任

【出典】『百人一首』五〇～五四

二〇　伝一乗院覚誉筆（いちじよういんかくよ）『古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「一乗院覚誉大僧正（きた山に）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦一五・四×横一七・四cm。字高、詞書、約二〇・〇cm、和歌、約二二・四cm。

【本文】

きた山に紅葉おらんとまかれりけるときに
よめる　つらゆき
みる人もなくてちりぬる奥山の紅葉はよるの錦成けり
秋のうた　かねみの王
たつ田姫たむくる神のあれはこそ秋の木葉のぬさとちるらめ
をのといふ所にすみ侍けるときもみちを
みてよめる　つらゆき
秋の山紅葉をぬさとたむくれはすむ我さへそたひ心ちする
神なひの山をすきてたつ田川をわたり
けるときに紅葉のなかれけるをよめる

【出典】『古今和歌集』巻第五・秋歌下・二九七～三〇〇

二一　伝定法寺公助筆（じょうほうじこうじょ）『老葉』断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「定法寺公助僧正（さ夜の）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦一八・〇cm×横一三・六cm。字高、上句、約一五・〇cm、下句、一七・〇cm。

【本文】

さ夜のほたるそあをく明たつ
白妙の雲のは山に蝉鳴て
　山のはうすくめくるむら雨
夕かせに蝉なく木末露おちて
　野はらの色のかるゝ程なさ
花におるかめの夏草打しほれ
　よろこひの眉をはいつかひらかまし
ゆふかほかゝるわひ人のやと

【出典】『老葉』第二・夏連歌・二八九～二九六

二二　伝一乗院良定筆（いちじょういんりょうじょう）　色紙

【書写年代】室町時代

【極札】「一乗院殿（良定有明の）（「守村」・黒方印）」（古筆別家二代了任）

【書誌】斐紙（僅かに金揉箔）墨書　縦一六・九×横二一・七cm。字高、約一五・二cm。

【本文】

藤原仲文

いたく　我か
ふけに　よの
有明の月の
　ひかりをま
ける　つほと
かな　に

【出典】『拾遺和歌集』巻第八・雑上・四三六（『拾遺抄』巻十・雑下・五〇一）。「有明の月の光をまつほどに我が世のいたくふけにけるかな」

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

二三　伝一乗院良誉筆　未詳歌集断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「一乗院良誉大僧正（ちりゆきし）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二一・一×横一三・一cm。字高、上句、約一四・五cm、下句、一五・八cm。

【本文】

ちり敷し花は又さく春のきて
去年のあらしのかすむ山さと
わらひを折し人のあはれさ
春山の木のした道に畑うちて
いそく時こそあしをそくなれ
御狩野にはしるきゝすの飛立て
かへさそをそき春の山みち
苔をふみ霞を分る寺ふりて

【出典】未詳歌集。『宗祇百句』春部、「ちりゆきし」（一一）、「わらひを折りし」（三七）、「春山の」（三八）、以下未詳。

二四　伝近衛尚通筆　『藤川五百首』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「近衛殿（尚通卿）（したへとも）（「守村」・黒方印）」（古筆別家二代了任）

【書誌】楮紙墨書　縦二五・九×横七・七cm。字高、約二二・〇cm。

【本文】

舟中暮春
したへとも春はとまらぬおなし江のたなゝし小舟こきや帰らん
卯花隠路
卯花の色にも猶やたとるらむ雪にまよひし小野ゝ細道

【出典】『藤川五百首』「したへとも」（九八）・「卯花の」（一〇三）

二五　伝近衛前久（このえさきひさ）（龍山）筆　書状断簡

【書写年代】室町時代後期～安土桃山時代

【極札】「近衛殿龍山御判形（琴山・黒方印）」（古筆本家五代了珉）

【書誌】楮紙墨書　縦一七・三×横一六・二cm。字高、約七・七cm。

【本文】

正月十一日（花押）

甫庵

【出典】安土桃山時代から江戸時代初期に活躍し、『太閤記』や『信長紀』の著者としても知られる小瀬甫庵（おぜほあん）（一五六四～一六四〇）に宛てた書状の自署名箇所の断簡。花押は前久。

二六　伝九条（くじょう）教家（のりいえ）筆　『弥勒講式』断簡

【書写年代】鎌倉時代末期～南北朝時代

【極札】「弘誓院殿教家卿第三（「箕山」・黒方印）」（藤本了因）

【書誌】斐紙墨書　縦三二・〇×横一六・八cm。界高二六・五、界幅二・七cm。

【本文】

第三欣求内院者依惣別因縁既帰依慈尊須
欣求兜率以期値遇夫十方三世補処菩薩
将成正覚先住兜率預薫修勝業厳浄其
処可謂穢土中浄土也事是鄭重勿輒軽哢
矣於菩薩所居有外院有内院上生経云若
我住世一少劫中広説不能窮盡我等拙詞

【出典】『弥勒講式』（貞慶撰）か

【備考】朱点・書き入れあり。

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

二七　伝九条稙通筆（くじようたねみち）『続草庵集』断簡

【書写年代】室町時代後期～安土桃山時代

【極札】「九条殿稙通公（かさこしや）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙（上方に青色卍繋ぎ文様、下方に青色牡丹唐草文様）墨書　縦二三・四×横一八・六cm。字高、約二一・七cm。

【本文】

かさこしや谷に夕ゐる白雲の中にそ落るきその山河
　長河似帯といふ事を
玉川の水のなかれの行めくりたえぬやゝかてゐての下をひ
　寛耀贈都に絵をあつらへ侍しをかき
　てをくり侍し返ことに
難波津のかせの心のかよひてやゑしまか磯の浪もかくらん
　雨後眺望
つねよりも見そまちかき須磨のうらや雨の晴まのあはち嶋山
　古集五言題百首に蒼苔満山径
暮ぬより日影も見えすみ山木のうへはしけれる苔の通路
　将軍家三首に山路雲
白雲のうつむ山路の末なれや夕日うつろふ嶺のかけはし

【出典】『続草庵集』巻第三・雑部・四〇四～四〇九

二八　伝洞院公賢筆（とういんきんかた）『和漢朗詠集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「洞院殿公賢公梅　付紅梅（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二八・八×横一四・七cm。字高、約二二・二cm。

【本文】

十三梅　付紅梅
千梅柳　白片落梅浮澗水黄梢新柳出城墻　春全白
千八立春　梅花帯雪飛琴上柳色和煙入酒中　章孝標早春初晴野宴
　漸薫臘雪新封裏偸綻春風未扇先　寒梅結早花村上御製
　青絲繆出陶門柳白玉裝成廋嶺海　尋春花江相公

【出典】『和漢朗詠集』巻上・春・八七～九〇

【備考】朱墨の書き入れあり。

二九　伝大炊御門経光筆　古歌短冊

【書写年代】江戸時代

【極札】「大炊御門殿経光公夕されは（「極」・黒方印）」（初代川勝宗久）

【書誌】斐紙（金切箔揉箔砂子散金草木文様）墨書
縦三五・七×横五・七cm。字高、約二六・五cm。

【本文】
夕されはまたれし物とおもふこそ
こゝろに残るかたみ成けれ

【出典】『続古今和歌集』巻第十四・恋歌四・一二一七番・大江忠成

三〇　伝花山院定誠筆　古歌短冊

【書写年代】江戸時代前期

【極札】「花山院殿定誠卿まつあさる（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙（金切箔揉箔砂子散金草木文様）墨書
縦三六・一×横五・五cm。字高、約二六・〇cm。

【本文】
平沙　まつあさる芦へのともにさそはれて
落鳥　そら行かりもまたくたるなり

【出典】『瀟湘八景詩歌』所収、冷泉為相詠か。

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

三一　伝橋本公夏筆（はしもときんなつ）『源氏物語』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「橋本殿公夏卿の御心よせ（「隨道」・朱瓢型印）」（三代畠山牛庵）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・三×横一三・六cm。字高、約二二・三cm。

【本文】

の御心よせなる梅のかをめておはするしつねををしおりてまいり
給へるにほひのいとえんにめてたきをおりおかしとおほして
おる（み）人の心にかよふはなれや色には出すしたににほへる
との給へは
みる人にかことよせける花のえを心してこそおるへかりけれ
わつらはしくとたはふれかはし給へるいとよき御あはひ也こまやかなる御
物語ともになりてはかの山さとの御事をそまつはいかにと宮はきこえ
給中納言も過にしかたのあかすかなしき事そのかみよりけふまて
おもひのたえぬよしおり〳〵につけてあはれにもおかしうもなきみわらひみ

【出典】『源氏物語』「早蕨」巻。池田亀鑑編著『源氏物語大成校異篇』一六七九頁六行目～一六八〇頁一行目。

【備考】朱墨の書き入れあり。

三二　伝三条公敦筆（さんじょうきんあつ）『源氏物語』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「轉法輪殿公敦公ひきこえけれ（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦一五・四×横一一・四cm。字高、約一二・八cm。

【本文】

ひきこえけれをの〳〵我身のよるへとたの
まんにいとたのもしき人なり是にあし
くせられては此ちかきせかいにはめくらひ
いくきはに哥よまゝほしかりけれはやゝひさ
しうおもひめくらして

【出典】『源氏物語』「玉鬘」巻。池田亀鑑編著『源氏物語大成校異篇』七二四頁四～六行目、及び七二六頁八～九行目に相当。

【備考】三と四行目間に紙継ぎの痕跡あり。一～三行目と四～五行目とは本文内容が連続せず、もと二葉別々の断簡同士が継がれ、一葉に仕立てられたか。当該断簡については拙稿「伝三条公敦筆源氏物語断簡考」（『早稲田大学図書館紀要』六七、二〇二〇年三月）参照。

三三　伝山科顕言筆（やましなあきとき）『千載和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「山科殿顕言卿毎春花芳と（箕山・黒方印）」（藤本了因）

【書誌】斐紙墨書　縦一三・三×横一二・八cm。字高、約一一・〇cm。

【本文】

毎春花芳といへるこゝろ
をよめる
源仲忠
春をへて匂をそふる山さくら
花は老こそさかりなりけれ
百首の哥たてまつりける
時よめる
待賢門院堀河
しら雲と峯の桜はみゆれとも
日のひかりはへたてさりけり

【出典】『千載和歌集』巻第一・春歌上・七一・七二

三四　伝清水谷実秋（しみずだにさねあき）筆『拾玉集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「清水谷殿実秋卿春ことに（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二七・〇×横七・五cm。字高、約一四・五cm。

【本文】

当座十首
依花忘行
春ことに花にこゝろの入ぬれは家をいてにしかひなかりけり
遥望藤花
なかめやるたかねの藤の花さかり心にかゝる雲かとそみる

【出典】『拾玉集』第四・四二二七・四二二八

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

三五　伝小倉実起筆（おぐらさねおき）　色紙

【書写年代】江戸時代前期

【極札】「小倉殿実起（左見わたせは）（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙墨書　縦二六・七×横二〇・一cm。

【本文】

左　　素性法師

見わたせは
柳さくらを
こきませて
みやこそはるの
にしきなりける

【出典】『古今和歌集』巻第一・五六・素性法師

三六　伝堀川具世（ほりかわともよ）筆　『新古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「堀川中納言具世卿（みちのくの）（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・一×横一六・三cm。字高、約二〇・六cm。

【本文】

みちのくのいはて忍はえそしらぬかきつくしてよつほのいしふみ
世のなかのつねなき心を

大江嘉言

けふまては人をなけきて暮にけりいつ身のうへにならんとすらん

皇嘉門院

なにとかやかへにおふなる草の名よそれにもたくふ我身なりけり

権中納言資実

こしかたをさなから夢になしつれはさむるうつゝのなきそかなしき
松の木のやけたるを見て

【出典】『新古今和歌集』巻第十八・雑歌下・一七八六・一七八七・一七八九・一七九〇

三七　伝清水谷実久筆（しみずたにさねひさ）『伊勢物語』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「清水谷殿実久卿（りけりすこし）（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙墨書　縦二五・六×横一六・七cm。字高、詞書、約二一・八cm、和歌、一六・三cm。

【本文】

りけりすこしたのみぬへきさまにやありけんふして
おもひおきておもひわひてよめる
あふな〳〵思ひはすへしなそへなく
たかきいやしきくるしかりけり
むかしもかゝる事はよのことはりにやありけむ
昔おとこ女ありけりいかゝありけむそのおとこすます
なりにけりのちにおとこありけれと子ある中なり
けれはこまかにこそあらねと時〳〵物いひをこせけり
女かたにゑかく人なりけれはかきにやれりけるをいまの

【出典】『伊勢物語』第九三・九四段

三八　伝万里小路惟房筆（までのこうじこれふさ）　未詳経句題断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「万里小路殿惟房卿（ひろひをき）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】楮紙墨書　縦二三・七×横一四・一cm。字高、約二一・七cm。

【本文】

採薪及菓蔬随時恭敬興
ひろひをき汲しる法のことのはゝ
けふのこのみの水上にして

【出典】未詳経句題。句題「採薪及菓蔬随時恭敬興」は『妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）』第十二・提婆達多品（だいばだつだぼん）。

三九　伝甘露寺元長筆（かんろじもとなが）『歌枕名寄』断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「甘路寺殿元長卿（是は）（箕山・黒方印）」（藤本了因）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・一×横一八・二cm。字高、約二〇・三cm。

【本文】

是はあつたの大明神の御哥となん　詞書略之

縣宮

（続古廿）〜我たのむあかたの宮のますかゝみくもらぬ影をあふきてそまつ　（中原師光朝臣）

さ（本）桜宮

（後拾）神風に心やすくそまかせつるさくらの宮の花のさかりを　西行

き（本）祇園　山城

三条院行幸の時東遊哥

（後拾遺拾九）千はやふる神のそのなるひめこ松萬代ふへきはしめ也けり　経衡

北野宮

（同九）ちはやふる神の北野に跡たれてのちさへかゝる物やおもはん

（極札貼付）

【出典】当該四首は、順に『歌枕名寄』にみられる名所歌である。「我たのむ」は、巻第五・一六五〇番歌、「神風に」は、巻第十七・天照篇・四六四二番歌、「千はやふる」は巻第四・一四二二番歌、「ちはやふる」は巻第五・一六五一番歌、

四〇　伝中山宣親（なかやまのぶちか）筆『新古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「中山殿宣親卿（しかのあまの）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・二×横一五・七cm。字高、約二一・三cm。

【本文】

（極札貼付）　よみ人しらす

しかのあまの塩やく煙かせをいたみたちのほらて山にたなひく

貫之

なにはめの衣ほすとてかりてたく芦火の煙たえぬ日そなき

忠岑

年ふれは朽こそまされ橋柱昔なからのなたにかはらて

恵慶法師

春の日のなからの浜に舟とめていつれかはしとゝへとこたへぬ

後徳大寺左大臣

【出典】『新古今和歌集』巻第十七・雑歌中・一五九二〜一五九五

四一　富小路資直筆　『拾遺和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「冨小路殿資直卿ゆく人を（「琴山」・黒方印）」（古筆本家二代了栄）

【書誌】斐紙墨書　縦二二・三×横一五・三cm。字高、約二一・九cm。

【本文】

ゆく人をとゝめかたみのから衣たつより袖のつゆけかるらん

おなし御めのとのせんに殿上のをのことも女房

なとわかれおしみ侍けるに

御めのと少納言

おしむともかたしやわかれ心なる涙をたにもえやはとゝむる

女蔵人参河

あつまちの草葉をわけむ人よりもをくるゝ袖そまつは露けき

題しらす　　読人しらす

わかるれは先涙こそさきにたていかてをくるゝ袖のぬるらん

わかるゝをおしとそおもひつるきはの身をよりくたく心のみして

【出典】『拾遺和歌集』巻第六・別・三二一～三二五

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

四二　伝藤原長房筆　『自讃歌』断簡

【書写年代】平安時代末期～鎌倉時代初期？

【極札】「海住山殿長房卿月の行（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二一・七×横一四・六cm。字高、約一九・七cm。

【本文】

月の行山に心ををくりいれて

やみなるあとの身をいかにせん

左近権少将具親

なにはかたかすまぬ浪もかすみけり

うつるもくもるおほろつき夜に

時しもあれたのむのかりのわかれさへ

花ちるさとのみ吉野の里

しきたへのまくらの上にすきぬ也

露をたつぬる秋のはつかせ

【出典】『自讃歌』異本歌・一四九・寂蓮法師、一三一～一三三・具親

四三　伝日野勝光筆（ひのかつみつ）『古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「むくさのひとつ　日野殿勝光（「長好」・黒楕円印）」（藤井常智）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二五・一×横一八・一cm。字高、約二三・〇cm。

【本文】

むくさのひとつにはそへうたおほさゝき
のみかとをそへたてまつるうた
なにはつにさくやこのはな冬こもり
いまははるへとさくやこのはな
といへるなるへし
ふたつにはかすへうた
さくはなに思つく身のあちきなさ
みにいたつきのいるもしらすて
といへるなるへし

（極札貼付）

【出典】『古今和歌集』仮名序

【備考】断簡左端部に計五箇所の綴穴跡あり。

四四　伝水無瀬兼成（みなせかねなり）筆『拾遺和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「水無瀬殿兼成卿（年のうちに）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二三・七×横六・五cm。字高、約二二・六cm。

【本文】

延きの御時の屏風に　　つらゆき
年のうちにつもれるつみはかきくらしふるしら雪と友にきえなん
屏風のゑに仏名のあしたに梅の木のもとに導師
とあるしとかはらけとりてわかれおしみたる所

【出典】『拾遺和歌集』巻第四・冬・二五八・二五九

四五　伝飛鳥井雅綱筆（あすかいまさつな）『後撰和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「飛鳥井殿雅綱卿（袖かはく）」（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二五・六×横一九・四cm。字高、詞書、約二一・二cm、和歌、約二四・〇cm。

【本文】

（極札貼付）　よみ人しらす

袖かはく時なかりつる我身にはふるを雨ともおもはさりけり

人のいみはてゝもとの家にかへりける日

ふるさとに君はいつらとまちとはゝいつれの空の霞といはまし

敦忠朝臣身まかりて又の年かの朝臣のをの

なる家みむとてこれかれまかりて物かたりし侍

けるついてによみ侍ける

清正

君かいにし方やいつれそ白雲のぬしなきやとゝみるかかなしさ

おやのわさしに寺にまうてきたりけるをきゝ

つけてもろともにまうてまし物をと人のいひ

けれ

よみ人しらす

【出典】『後撰和歌集』巻第二十・哀傷歌・一四一四～一四一六

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

四六　伝飛鳥井雅親筆（あすかいまさちか）『千載和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「飛鳥井殿雅親卿（あふ事を）」（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・八×横一七・〇cm。字高、詞書、約二〇・〇cm、和歌、約二二・三cm。

【本文】

（極札貼付）　藤原のしけもと

あふ事をその年月と契らねは命や恋のかきり成らん

中院右大臣中将に侍りける時哥合し侍けるに

恋の哥とてよめる　藤原宗兼朝臣

恋わたる涙の川に身をなけんこの世ならても逢せありとや

前参議親隆

みちのくのとつなの橋にくるつなのたえすも人に恋わたるかな

逐日増恋といへる心をよませ給ける

院御製

恋わたるけふの涙にくらふれはきのふの袖はぬれし数かは

【出典】『千載和歌集』巻第十二・恋歌二・七一四～七一七

四七　伝六条有純筆（ろくじようありずみ）　古歌短冊

【書写年代】江戸時代初期

【極札】「六條殿有純卿（足引の）（「幽碩」・黒方印）」（末田幽碩）

【書誌】斐紙（金切箔揉箔金銀砂子・金草木文様）墨書

縦三六・三×横五・六cm。字高、約二五・七cm。

【本文】

足引の山鳥のおのしたりおの
なかなかし夜を独かもねむ

【出典】『万葉集』二七〇二

四八　伝中御門宣胤筆（なかみかどのぶたね）　『拾玉集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「中御門殿宣胤卿（よとゝもに）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦五・八×横一一・六cm。字高、約一二・五cm。

【本文】

よとゝもにあるかひもなき身にしあれは世をすてゝこそ世をはいとはめ
おさめをくちゝのこかねも身にそひて黄なるはたへとならはこそあらめ
くらゐ山さかゆくみねにのほるとてまことのみちをよそにみる哉
春の日のなかき命とみし人もみねのさくらにたくひぬる哉
紅葉ゝのちるはことはり色かへぬ松の下葉もうき世なりけり
世をわたる心のあしはかたくともひま行こまのあちきなのよや
わたり川われしつむともいかにして人をたすくるふなよそひせん
とりへ野にをくりてかへる人もみなしての山路のつゐの友哉

【出典】『拾玉集』第一・厭離百首・六八七～六九四

四九　伝久世通音筆（くぜみちおと）　短冊

【書写年代】江戸時代

【極札】「久世殿（すゝしくも）題有名（「極」・黒方印）」（二代川勝宗久）

【書誌】斐紙（天藍打曇）墨書　縦三六・六×横五・四cm。字高、約三〇・二cm。

【本文】

夕納涼　すゝしくも草葉にみえてふくからに
あきをもよほす庭の夕かせ　通音

【出典】未詳歌

五〇　伝世尊寺行能筆（せそんじゆきよし）『新古今和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代

【極札】「世尊寺殿（行能卿）（「重」・黒方印）」（古筆了雪）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・六×横九・三cm。字高、約一八・五cm。

【本文】

右　小侍従

つらきをもうらみぬわれにならふなよ
うき身をしらぬ人もこそあれ

左　大納言経信

ゆふひさすあさちかはらのたひゝとは
あはれいつくにやとをかるらん

【出典】『新古今和歌集』九五一・経信、一二二七・小侍従

五一　伝世尊寺行尹筆（せそんじゆきただ）『後撰和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代～南北朝時代

【極札】「世尊寺殿行尹卿（ちゝの）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二五・〇×横一五・七cm。字高、詞書、約一六・五cm、和歌、約二一・二cm。

【本文】

ちゝのみこのこゝろさせるやうにも
あらてつねにものおもへる人になん
ありける
春の池のほとりにて
よみ人しらす
はるの日のかけそふいけのかゝみには
やなきのまゆそまつはみえける
はるこれかれ花をゝしみける所にて
かくなからちらて世をやはつくしてぬ（む）
はなのときはもありとみるへく

【出典】『後撰和歌集』巻第三・春歌下・九四・九五

五二　伝藤原行成筆（ふじわらのこうぜい）『妙法蓮華経』断簡

【書写年代】平安時代末期か

【極札】「行成卿（「琴山」・黒方印）」（古筆家初代了佐か）

【書誌】紫紙銀字　縦二六・四×横五・七cm。界高二四・八、界幅一・八cm。

【本文】

度脱無量衆　皆悉得成就　雖小欲懈怠　漸当令作仏
内祕菩薩行　外現是聲聞　少欲厭生死　実自浄仏土
示衆有三毒　又現邪見相　我弟子如是　方便度衆生

【出典】『妙法蓮華経』第四

五三　伝小野道風筆（おののとうふう）『妙法蓮華経』断簡

【書写年代】平安時代～鎌倉時代か

【極札】「小野道風朝臣諸梵（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】紺紙銀界金字　縦二七・三×横五・九cm。
界高二一・七、界幅一・九cm。

【本文】
諸梵見此相　尋来至仏所　散花以供養　并奉上宮殿
請仏轉法輪　以偈而讃歎　仏知時未至　受請默然坐
三方及四維　上下亦復尓　散花奉宮殿　請仏轉法輪

【出典】『妙法蓮華経』第三

五四　伝朝野魚養筆（あさのなかい）『大方広仏華厳経』断簡

【書写年代】奈良時代か

【極札】「魚養善入（「守村」・黒方印）」（古筆別家二代了任）

【書誌】黄麻紙（薄墨界線）墨書　縦二五・二×横六・一cm。
界高二一・四、界幅二・〇cm。

【本文】
善入甚深　諸禅正受　分別了知　一切三昧
清浄智慧　了達三世　一切世間　所不能知
身口諸業　及與意業　音声語言　皆悉清浄

【出典】『大方広仏華厳経』巻第二十二

五五　伝明恵上人筆（みようえしようにん）『大般涅槃経』断簡

【書写年代】鎌倉時代初期

【極札】「栂尾明恵上人是因縁（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙（墨界）墨書　縦二六・三×横九・二cm。界高二一・〇、界幅一・八cm。

【本文】

是因縁教授経法是人至心受持誦習持誦
習已獲得智慧得智慧已能善思惟如法而
住善思惟已則得正義得正義已身心寂静
身心寂静已則生喜心喜心因縁心則得定
因縁得定故則得正知見正知見已於諸有

【出典】『大般涅槃経』巻第三十二

五六　伝俊寛（しゅんかん）筆『古今和歌集』断簡

【書写年代】平安時代末期

【極札】「俊寛僧都おちたきつ（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二一・八×横一一・八cm。字高、約一八・三cm。

【本文】

ひえの山なるおとはのたきをみてよめる
たゝみね
おちたきつたきのみなかみとしつもり
おひにけらしなくろきすちなし
おなし瀧をよめる
躬恒
ヨ本ニタキニかせ吹とゝころもさらぬ白雲は
ソアリケルよをへておつる水にそありける

【出典】『古今和歌集』巻第十七・雑歌上・九二八・九二九

五七　伝寂蓮筆（じやくれん）『古今和歌集』断簡

【書写年代】平安時代末期～鎌倉時代初期
【極札】「寂蓮法師（なにはなる）（「極」・黒方印）」（初代川勝宗久）
【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦一七・七×横一五・四cm。字高、約一六・三cm。
【本文】
なにはなるなからのはしもつくるなり
いまはわかみをなにゝたとへむ
読人不知
まめなれとなにそはよけてかるかやの
みにたれてあれとあしけくもなし
興風
なにかそのなのたつことのをしから む
しりてまとふはわれひとりかは
【出典】『古今和歌集』巻第十九・雑体・一〇五一～一〇五三
【備考】五八の断簡が本断簡に重ねて貼り込まれている。

五八　伝本願寺実如（ほんがんじじつにょ）筆　未詳仏書断簡

【書写年代】室町時代後期
【極札】「本願寺殿實如上人（間ノヒトヲ）（「養心」・朱方印）」（三代神田道僖）
【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦一九・一×横一二・六cm。字高、約一七・〇cm。
【本文】
間（ケン）ノヒトヲミルニ生死（シヤウシ）の□（シヤウ）无常ハシリカホニ
シテ（ツクリテ地獄ニヲ）イトハス浄土（シヤウト）ノ往生（ワウシヤウ）ハ子カフトスレ（大天常　小天常）
トモイコトナシ穢土（エニゴルト）ノイトハシキコトヲ（ケカル）
シリテ極楽（ゴクラク）ノ子カハルゝコゝロハヲコルナリ
念死念仏（ネンシネンブチ）ノ二念（ニネンヨウシム）要心（ネンヨウシム）ノ寂要（サイヨウ）ナリイツ
念死（ネンシ）トイフスハワカ身（ミ）ヲ蜉蝣（フユウ）ノアタナル
【出典】未詳仏書
【備考】左右端の裁断箇所に文字跡あり。元は左右に少なくともそれぞれ一行分の本文が付随していた。

五九　伝慈鎮和尚（じちんおしょう）『定家八代抄』断簡

【書写年代】鎌倉時代初期

【極札】「慈鎮和尚（いまさらに）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二一・一×横一二・九cm。字高、約一六・九～一八・六cm。

【本文】

読人不知

新　いまさらに雪ふらめやもかけろふの
もゆる春日となりにしものを

志貴女王（シクキ）

新　いはそゝくたるみのうゑのさわらひの
もえいつる春になりにけるかな

中納言行平

古　春のきるかすみのころもぬきをうすみ
山かせにこそ乱（ミタル）へらなれ

【出典】『定家八代抄』巻第一・春歌上・六五～六七

六〇　伝藤原為家（ふじわらのためいえ）筆『拾遺抄』断簡

【書写年代】鎌倉時代中期

【極札】「為家卿（あふことは）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二一・四×横一四・三cm。字高、約一七・一cm。

【本文】

あふことは心にもあらてほとふとも
さやはちきりしわすれはてねと

たいよみ人しらす

あふみなるうちてのはまのうちいてつ（てつ）、
うらみやせまし人のこゝろを

つのくにのいくたのいけのいくたひか
つらきこゝろをわれにみすらん

小野宮大臣むすめのもとにつかはしける

【出典】『拾遺抄』巻第八・恋下・七十四首・三二八～三三〇

六一　伝二条為氏筆（にじょうためうじ）『新古今和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代中期

【極札】「二條家為氏卿（あれはて、）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二一・五×横一四・六cm。字高、約一八・七cm。

【本文】

あれはてゝかせもさはらぬこけのいほに
われはなくとも露はもりけん
　題しらす　　西行法師
やまふかくさこそこゝろはかよふとも
すまてあはれをしらむものかは
やまかけにすまぬこゝろはいかなれや
をしまれている月もあるよに
　山家送年といへる心をよみ侍ける
　　寂蓮法師
たちいてゝつま木おりこしかたをかの

【出典】『新古今和歌集』巻第十七・雑歌中・一六三一～一六三四

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

六二　伝二条為世（にじょうためよ）筆『拾遺和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「二條家為世卿（あきのよに）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二一・八×横一五・一cm。字高、約一八・一cm。

【本文】

　　貫之
あきのよにあめときこえてふりつるは
風にみたるゝもみちなりけり
こゝろもてちらんたにこそをしからめ
なとかもみちにかせのふくらん
　あらしのやまのもとにまかりけるに
　もみちのいたくちり侍けれは
　　右衛門督公任卿
あさまたきあらしのやまのさむけれは
ちるもみちはをきぬ人そなき
　　大中臣能宣

【出典】『拾遺和歌集』巻第三・秋・二〇八～二一〇

六三　伝定為筆（じょうい）『新勅撰和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代末期

【極札】ナシ。

【書誌】斐紙墨書　縦二一・六×横一三・四cm。字高、約一九・七cm（五行目）。

【本文】

新勅撰和謌集巻第十

釈教哥

土左国室戸といふ所にて

弘法大師

法性のむろといへとわかすめは

うゐのなみかせよせぬ日そなき

はちすのつゆをよみ侍ける

【出典】『新勅撰和歌集』巻第十・釈教歌・五七四

六四　伝古筆了佐（こひつりょうさ）筆　奥書極断簡

【書写年代】江戸時代初期

【極札】ナシ。

【書誌】楮紙墨書　縦二四・一×横一七・二cm。字高、一七・五cm（三行目）。

【本文】

法印定為筆

特進藤（花押）

此一軸法印定為御真跡

無論之者也

寛永元年

八月廿五日　了佐極之（花押）

【出典】古筆了佐（一五七二～一六六二）による伝定為筆『新勅撰和歌集』断簡の奥書極か。

【備考】六三の伝定為筆『新勅撰和歌集』断簡の奥書極か。当該断簡は別々の二紙を呼び継ぎしており、一葉の断簡のように仕立てられている。右面（縦二四・一×横四・九cm）は烏丸光広、左面（縦二四・一×横一二・二cm）は古筆家初代了佐の鑑定である。当該断簡の詳細は別稿で報告する。

六五　伝二条為定筆『古今和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代末期～南北朝時代

【極札】「うくひすの　二条家　為定（「長延」・黒楕円印）」（藤井常智）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・二×横一五・五cm。字高、約二一・八cm。

【本文】

うくひすのなくをよめる
そせい法師
木傳
木つたへはおのかはかせに花をたれにおほせてこゝらなくらん
うくひすの花の木になくをよめる
みつね
しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに
駒嶺　題しらす　読人しらす
誘引　大和　吉野也
こまへていさみにゆかんふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ
ちる花をなにうらみけむ世の中に我身もとりにあらんものかは

【出典】『古今和歌集』巻第二・春歌下・一〇九～一一二

【備考】朱の合点・傍書・補入・見せ消ちあり。

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

六六　伝二条為親筆『古今和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代

【極札】「二條家為親卿郭公（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・四×横一五・七cm。字高、約二一・四cm。

【本文】

（極札貼付）
る
つらゆき
郭公けさなくこゑにおとろけは君をわかれし時にそありける
さくらをうへてありけるにやうやく花さきぬへき時に
かのうへける人身まかりにけれはその花を見てよめる
きのもちゆき　茂行
花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひむとかみし
あるし身まかりける人の家のむめのはなを見てよめる
つらゆき
色もかも昔のこさにのにほへともうへけむ人の影そこひしき
河原の左のおほいまうちきみの身まかりてのゝちかの
家にまかりてありけるにしほかまといふ所のさまをつ
くれりけるを見てよめる
君まさて煙たえにししほかまの浦さひしくも見えわたる哉

【出典】『古今和歌集』巻第十六・哀傷・八四九～八五二

六七　伝二条為明筆（にじょうためあき）『物語二百番歌合』断簡

【書写年代】鎌倉時代～南北朝時代

【極札】「二條家為明卿（あさほらけ）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦一五・三×横一四・七cm。字高、約一四・二cm。

【本文】

はしといふところにこもりな
んとて
右大臣四君
あさほらけゆふつけとりもゝろともに
なく〳〵こゆるあふさかのせき
九十番　左同　右露宿
左　六君に兵部卿のみやかよひそ
めさせ給けるよふけゆくまて
おはしまさゝりけれは
右大臣
おほそらの月たにやとれ（る）わかやとに
まつよひすきみへぬきみかな

【出典】『物語二百番歌合』後百番歌合・三七八・三七九

六八　伝二条為忠筆（にじょうためただ）『拾遺和歌集』断簡

【書写年代】南北町時代

【極札】「二條家為忠卿（本院の）（「幽碩」・黒方印）」（末田幽碩）

【書誌】斐紙墨書　縦一六・一×横一四・二cm。字高、約一三・八cm。

【本文】

本院の中君のもとにまかりて
あかてまたのあしたに
大納言重光
ふたつなきこゝろは君におきつるを
またほともなくこひしきやなそ
読人不知
いつしかとくれをまつまのおほそらは
くもるさへこそうれしかりけれ
女許にまかりはしめてつとめて
つかはしける

【出典】『拾遺和歌集』巻第十二・恋二・七二一・七二二

六九　伝二条為重筆（にじようためしげ）『和漢朗詠集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「二條家為重卿水無返夕（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙（墨界線）墨書　縦三一・四×横一五・七cm。界高二五・九、界幅二・九cm。

【本文】

水無返夕流年涙花豈重春暮菌粧
林霧校声鶯不老岸風論力柳猶強
酔対落花心自静眠思餘算涙先紅
ますかゝみそこなるかけにむかひてみる時にこそ
しらぬおきなにあふ心ちすれ
いつくにか身をはよせましよの中に
おいをいとはぬ人しなければ

【出典】『和漢朗詠集』巻下・七二八～七三二

【備考】書き入れあり。

七〇　伝二条為右（にじようためすけ）筆『新後拾遺和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代～室町時代

【極札】「二條家為右よひのまは（「守村」・黒方印）」（古筆別家二代了任）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・五×横一四・二cm。界線二五・九、界幅二・九cm。

【本文】

藤原宗秀
よひのまはしはしまたれてほとゝきす
ふくれは月のかけになくなり
昇殿ゆるされてのころ郭公の
哥に　　卜部兼熙朝臣
またれつる雲ゐのうへのほとゝきす
ことしかひあるはつねをそきく

【出典】『新後拾遺和歌集』巻第七・雑春歌・六七五・六七六

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

七一　伝覚源（かくげん）筆　『雲葉和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代後期

【極札】「二條家覚源法師（かすかの丶）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二〇・七×横一三・一cm。字高、約一七・九cm。

【本文】

承久元年内裏十首哥合に野径霞

前中納言定家

かすかの丶かすみのころもやまかせに
しのふもちすりみたれてそゆく

題しらす　伊勢

はるかすみたちての丶ちにみわたせは
かすかのをのはみゆきさむけし

二條院讃岐

はるかせはさらにゆきけに吹かえて
みねのかすみそ雲かくれ行

【出典】『雲葉和歌集』巻第一・春歌上・三四～三六

七二　伝冷泉為相（れいぜいためすけ）筆　『後拾遺和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代

【極札】「冷泉殿為相（さきにたつ）（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙墨書　縦二三・八×横一四・一cm。字高、約二二・〇cm。

【本文】

読人不知

さきにたつなみたをみちのしるへにて
われこそゆきていはまほしけれ

【出典】『後拾遺和歌集』巻第十・哀傷・六〇三

七三　伝冷泉為秀筆（れいぜいためひで）『千載和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「冷泉殿為秀卿（おほゐのみかと）（「極」・黒方印）」（二代川勝宗久）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・〇×横一六・一cm。字高、約二一・八cm。

【本文】

おほゐのみかとの右大臣みまかりて
のちかのしるしをきて侍りける
私記ともの侍りけるをみてよみ侍り
ける　　右のおほいまうちきみ
おしへをくそのことの葉をみるたひに
またとふかたのなきそかなしき
母の二位みまかりてのちよみ侍りける
　　民部卿しけのり
とりへ山おもひやるこそかなしけれ
ひとりやこけのしたにくちなん

【出典】『千載和歌集』巻第九・哀傷・五九〇・五九一

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

七四　伝藤原秀能筆（ふじわらのひでよし）『古今和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代

【極札】「藤原秀能（千載既後入代と集雪のふりけるを）（「箕山」・黒方印）」（藤本了因）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・一×横一四・七cm。字高、約一八・五cm。

【本文】

雪のふりけるをよみける
　　きよはらのふかやふ
冬なからそらより花のちりくるは
雲のあなたは春にやあるらん
雪の木にふりかゝれるをよめる
　　つらゆき
冬こもりおもひかけぬをこのまより
花とみるまて雪そふりける

【出典】『古今和歌集』巻六・冬歌・三三〇・三三一

七五　伝足利義視（あしかがよしみ）筆　『歌枕名寄』断簡

【書写年代】室町時代中期

【極札】「大智院殿（義視卿）（あしきたの）　了任」（「守村」・黒方印）（古筆別家二代）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二七・二×横六・三cm。字高、約二三・六cm。

【本文】

肥後　葦北郡

万又続後撰

あしきたののさかの浦に舟出してみしまにゆかん波たつな夢　長田王

水嶋　同郡

同

きゝしことまことたうとくあやしくも神さひをるは　みつしま

【出典】『歌枕名寄』のうち、「あしきたの」は、巻第三十五・筑前国・九〇〇四番歌、「きゝしこと」同・九〇〇三番歌。

七六　伝今川了俊（いまがわりょうしゅん）筆　未詳歌集断簡

【書写年代】南北朝時代～室町時代

【極札】「今川了俊（百四十六）（秋の色の）」（「養心」・黒方印）（四代神田道伴）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二五・二×横九・四cm。字高、約二二・八cm。

【本文】

百四十六

秋の色の花のおとゝきゝをけと

霜のおきなとみゆるしら菊

もろ人のことはの花のきくならは

霜やつもりてわかの浦波

【出典】未詳歌集

七七　伝北条氏政筆　古歌短冊

【書写年代】室町時代

【極札】「北條右京大夫氏政相坂の（「養心」・黒方印）」（四代神田道伴）

【書誌】斐紙（天藍地紫打曇金銀霞金銀草木鳥下絵）墨書　縦三四・九×横五・二cm。字高、約二九・〇cm。

【本文】

相坂のゆふ付鳥もわかれちを
憂ものとてや鳴はしめけむ

【出典】『新勅撰和歌集』巻第十三・恋歌三・八一二・法印幸清

七八　伝飯尾常房筆　色紙

【書写年代】室町時代

【極札】「飯尾左衛門尉常房（「牛菴」・朱瓢型印）」（二代畠山牛庵）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・七×横二〇・九cm。字高、約二一・五cm。

【本文】

なにはつにさくや
このはなふゆ
こもり
いまは春へと
さくやこの
はな

【出典】『古今和歌集』仮名序

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

七九　伝池田正能筆（いけだまさよし）『竹林抄』断簡

【書写年代】室町時代後期
【極札】「池田帯刀正能朝露（はる）（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）
【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦一八・九×横一七・七cm。字高、約一六・三cm。
【本文】
朝露を野（は）を花そめのしくれかな
　あつま（と）へくたり侍しときうみ
　つらちかきやとりにて
あさしほはひさき風ふく浜へかな
　たいしらす
柳ちり鳥かねさむき河辺かな
　賢盛
梅かえをわきて秋なる木葉かな
（極札貼付）
【出典】『竹林抄』巻第十・発句・一七二四～一七二七。歌番号は、厳島神社宮司野元良氏蔵本を底本とする『新日本古典文学大系49　竹林抄』（岩波書店、一九九一年）に拠る。宮内庁書陵部所蔵の古筆手鑑（函架番号　E一－四三）にツレの断簡（一七一九・一七二〇番）があり、「文明十四年十月日／正能」と年紀と筆者名の記された別紙が呼び継がされている（久保木哲夫・杉谷寿郎・平林盛得・別府節子編『古筆手鑑叢刊1　宮内庁書陵部蔵　古筆手鑑』貴重本刊行会、一九九九年）。

八〇　伝桜井基佐（さくらいもとすけ）筆　未詳歌集

【書写年代】室町時代中期
【極札】「桜井基佐こゝろゆく（「琴山」・黒方印）」（不明）
【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦一二・一×横九・六cm。字高、約八・九～九・一cm。
【本文】
こゝろのゆくは
　そふやそはすや
花をみはたれも
みるへき玉札に　基佐
夢にてもひとりそ
　みゆる旅の空　宗佐
【出典】未詳歌集

八一　伝楠長諳（くすのきちょうあん）筆　『長恨歌』断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「楠長諳生門戸（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙墨書　縦三二・八×横一〇・八cm。字高、約二六・七cm。

【本文】

生門戸遂令天下父母心不重生
男重生女驪宮高処入青雲
仙楽風飄処〻聞緩哥慢舞

【出典】『長恨歌』

八二　伝蜷川親当（にながわちかまさ）筆　古歌短冊

【書写年代】室町時代中期

【極札】「蜷川親當秋の色に（「極」・黒方印）」（初代川勝宗久）

【書誌】斐紙（天藍打曇金霞金銀草花下絵）墨書　縦三四・三×横五・〇cm。字高、約二四・三cm。

【本文】

秋霜　秋の色にのこるかたみの霜をたに
せけかし草葉それもとまらす

【出典】『題林愚抄』第十一・秋部四・四三四二

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

八三　伝仁和寺弘融筆（にんなじこうゆう）『後撰和歌集』断簡

【書写年代】鎌倉時代

【極札】「仁和寺殿（弘融筆）よそにのみ（「守村」・黒方印）」（古筆別家二代了任）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二五・八×横一〇・二cm。字高、約二二・九cm。

【本文】

延喜御製

よそにのみ松はゝかなきすみのえのゆきてさへこそ見まくほしけれ

題しらす　　ひとしの朝臣

かけろふに見し許にやはまちとりゆくゑもしらぬこひにまとはむ

あり所はしりなからえあふましかりける人につかはしける

藤原兼茂朝臣　参議

わたつうみのそこのありかはしりなからかつきていらむ浪のまそなき

女の許につかはしける　　橘さねとしの朝臣

つらしとも思そはてぬ涙河流て人をたのむ心は

返し　　よみ人しらす

【出典】『後撰和歌集』巻第十・恋二・六五三～六五六

八四　伝兼空筆（けんくう）『後拾遺和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「兼空上人（集入そのかみの）（「重」・黒方印）」（古筆了雪）

【書誌】斐紙墨書　縦二五・五×横一〇・九cm。字高、約二二・五cm。

【本文】

そのかみの人はのこらしはこさきの松はかりこそわれをしるらめ

阿波守になりてまたおなし国にかへりなりてく

たりけるにこつかみのうらといふ所に浪のたつを

見てよみ侍ける　　藤原基房朝臣

こつかみのうらに年へてよる浪もおなし所にかへるなりけり

頼国朝臣紀伊守にて侍けるときいふへき事

ありてまかりて侍りけるをことさらにものいはさりけ

【出典】『後拾遺和歌集』巻第十九・雑五・一一二九・一一三〇

八五　伝浄弁筆（じょうべん）『古今和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「和哥四天王之内浄弁（「琴山」・黒方印）」（古筆家初代了佐）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・〇×横一〇・七cm。字高、約二〇・一cm。

【本文】

しらかはのしらすともいはしそこきよみ
なかれてよゝにすまむとおもへは
　　とものり
したにのみこふれはくるしたまのをの
たえてみたれん人なとかめそ
わかこひをしのひかねてはあしひきの
やまたちはなの色にいてぬへし

【出典】『古今和歌集』巻第十三・恋歌三・六六六～六六八

八六　伝頓阿筆（とんあ）『古今和歌集』断簡

【書写年代】南北朝時代

【極札】「頓阿法師住の江の前圃筆（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二四・一×横一四・一cm。字高、約二二・五cm。

【本文】

住の江の松ほとひさになりぬれはあしたつのねになかぬ日はなし
枇杷大臣仲平（朱）なかひらの朝臣あひしりて侍けるをかれかたに
なりにけれはちゝかやまとのかみに侍けるもとへ
まかるとてよみてつかはしける
　　伊勢
みわの山いかにまちみむ年ふともたつぬる人もあらしと思へは
題しらす　　雲林院のみこ（常康親王仁明御子□□女）（朱）
吹まよふ野風をさむみ秋はきのうつりも行か人の心の

【出典】『古今和歌集』巻第十五・恋歌五・七七九～七八一

八七　伝堯孝筆（仏光寺切）『新続古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「和哥所法印堯孝あまつそら（「幽碩」・黒方印）」（末田幽碩）

【書誌】斐紙墨書　縦二五・三×横一八・二cm。字高、約二一・七cm。

【本文】

極札貼付　いふことを
　　大江千里
あまつそらたかくはれつゝ見えつるは
くれ行山のとをきなりけり
　　たいしらす
　　平常顕
夕日さすやまのたかねにあらはれて
くもゐにたてる松のひとむら

【出典】『新続古今和歌集』巻第十八・雑歌中・一八二〇・一八二一

八八　伝円雅筆　『新古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「堯孝門弟圓雅あり明の（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二六・一×横一六・七cm。字高、約二三・五cm。

【本文】

　　摂政太政大臣
あり明のつれなくみえし月はいでぬ山ほとゝきす待つよなからに
　　後徳大寺左大臣家に十首哥よみ侍ける
　　によみてつかはしける
　　皇太后宮大夫俊成
わか心いかにせよとてほとゝきす雲まの月のかけになくらん
　　郭公の心をよみ侍ける
　　前太政大臣
郭公なきているさの山のはゝ月ゆへよりもうらめしきかな

（極札貼付）　権中納言親宗

【出典】『新古今和歌集』巻第三・夏歌・二〇九～二一一

八九　伝周興（しゅうこう）筆　『新続古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「堯孝門弟周興花ちると（「重」・黒方印）」（古筆了雪）

【書誌】斐紙墨書　縦二六・三×横一七・七cm。字高、約二二・〇cm。

【本文】

花ちるとなにうらみけむ吹風のさそはぬ春もとまる物かは

弘長百首歌に　前大納言為氏

きてみむといひしはかりにうつろひぬ三月の花の春の暮かた

千五百番歌合に　後京極摂政前太政大臣

初瀬山花に春風吹はてゝ雲なきみねに在明の月

承久元年七月歌合に暮春雨といふことをよま

せ給うける　順徳院御製

花もみなちりにしやとのふかみとりおしまぬ色を春雨そふる

前大納言為家

【出典】『新続古今和歌集』巻第二・春歌下・二〇八～二一一

九〇　伝正徹（しょうてつ）筆　『新古今和歌集』断簡

【書写年代】室町時代前期

【極札】「招月菴正徹かなしさは（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・六×横一五・八cm。字高、約二二・〇cm。

【本文】

かなしさは秋のさか野ゝきり〳〵す猶ふる里にねをや鳴らん

母の身まかりにけるをさか野へんにをさめ侍ける夜よみ

ける　皇太后宮大夫俊成女

いまはさはうき世をさかの野へをこそ露消はてしあとゝ忍はめ

母身まかりにける秋野分しける日もとすみ侍ける所

にまかりて　定家朝臣

玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふるやとのあきかせ

ちゝ秀宗身まかりての秋寄風懐旧といふことを

よみ侍ける　藤原秀能

露をたにいまはかたみのふち衣あたにも袖を吹あらしかな

久我内大臣春の比うせて侍けるとしの秋土御門

内大臣中将に侍りけるときつかはしける

【出典】『新古今和歌集』巻第八・哀傷歌・七八六～七八九

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

九一　伝正般筆（しょうはん）　色紙

【書写年代】室町時代

【極札】「徹書記門人正般徹桜あさの（「養心」・朱方印）」（四代神田道伴）

【書誌】斐楮交漉紙（山に草花金下絵）墨書　縦一八・〇×横一七・一cm。字高、約一四・六cm。

【本文】

ありつるあふき御らんすれは
もてならしたるうつり香いとしみ
ふかうなつかしうておかしうすさみ
かきたり
こゝろあてに
それ
かとそそみる
夕かほの　白露の
花　ひかりそへたる

【出典】『源氏物語』「夕顔」巻。和歌、夕顔詠。

【備考】極札の書き出しと断簡本文、不一致。『新古今和歌集』一八五・一四七三番歌のいずれかか。

九二　伝漸空上人筆（ぜんくうしょうにん）『倭名類聚抄』断簡

【書写年代】鎌倉時代中期〜後期

【極札】「漸空上人花瓦　弁（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二四・四×横一五・〇cm。字高、約二〇・四cm。

【本文】

花瓦　弁色云－－鐙瓦也阿不三加波良
蔬瓦　同－－－豆丶三加波良
牝瓦　唐韻云瓸音板和名女加波良　屋－－也
牡瓦　同－甑音皆和名乎加波良襜唐韻云－余廉反字又作簷和名乃木
桟　漢語抄云－瓦乃江豆利初限反日本紀蘆藿和名上同
今案唐韻藿胡官反葦也然則以蘆葦為－也
鵄尾　唐令云宮殿皆四阿施－－弁色立九豆加太

【出典】『倭名類聚抄』巻十

【備考】元の装訂は粘葉装。高田信敬「伝漸空上人筆和名類聚抄断簡―粘葉装の十巻本―」（『文献学の栞』武蔵野書院、二〇二〇年。初出は同題『国文鶴見』五三、二〇一九年三月）参照。

九三　伝素眼（そがん）筆　古歌短冊

【書写年代】南北朝時代～室町時代初期

【極札】「素眼法師散のこる（※印文不読・黒方印）」（初代朝倉茂入）

【書誌】斐紙（天藍地紫打曇・上方下方金砂子散・中間金砂子金泥花下絵）墨書　縦三五・二×横四・九cm。字高、約二四・九cm。

【本文】

散のこる花もやあると打むれて
　み山かくれを尋ねてしかな

【出典】『新古今和歌集』巻第三・春歌下・一六七

九四　伝六角堂専順（ろつかくどうせんじゆん）筆『表佐千句』断簡

【書写年代】室町時代中期

【極札】「六角堂専順（琴山）」（古筆本家了佐か）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二〇・〇×横一一・九cm。字高、約一六・五cm。

【本文】

（極札貼付）へはいかゝせむ　宗祇
けふにてしりぬあすのあらまし　専順
神まつり近くなるかといみさして　紹永
おくにはたれかこもる山くち　基昭
雲かゝる嶺のいほりの松の門　宗祇
道とちはてゝ雪そつもれる　専順
こぬくれを人の心の跡なれや　基昭
文を見るにもおもひたえけり　氏忠

【出典】『表佐千句』第三・唐何・つきはたた

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

九五　伝細見宗高筆（ほそみむねたか）『源氏物語』注釈断簡

【書写年代】室町時代中～後期
【極札】「ふちのうら葉　細見河内守入道宗高（「長好」・黒楕円印）」（藤井常智）
【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二二・一×横一三・六cm。字高、約一八・二cm。
【本文】
・ふちのうら葉
さすかなる〈御〉もろ恋なり
〈男女〉相互恋慕之心也
〈かの〉宮にもさやうに　〈中務宮〉（不入系図とあり）
なとかいと〈こ〉よなくはかむし給へるけふの御法
のえにたつねおほさはつみゆるし給てよや
〈無此世〉〈無超〉〈閑雅〉　幽玄儀也
こゝらのとしころの　〈臣〉と等　〈多〉と等（日本紀）
【出典】未詳の『源氏物語』「藤裏葉」巻、注釈断簡。内容は巻冒頭部分の注釈。注釈書所引本文について池田亀鑑編著『源氏物語大成　校異篇』の該当箇所の頁数と行数を示す。九九七・六、九九六・七、九九八・二～三、九九九・四、一〇一六・七、一〇一六・七～九。朱合点・朱点あり。当該断簡は、小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（伊井春樹編『本文研究　考証・情報・資料　第6集』和泉書院、二〇〇四年）に計九葉を数える断簡である。さらに近時、当該断簡について考証した高田信敬「伝宗高筆源氏物語注釈断簡―その基礎的報告―」（『武蔵野文学　武蔵野文学第70集記念特集　源氏物語と古筆切』七〇、二〇二二年一一月）は計八葉を数える（前述小林の集成稿との重複四葉）。これら先行論をふまえると当該断簡の内訳は「梅枝」（推定）、「藤裏葉」「若菜上」「若菜下」「横笛」「鈴虫」「竹河」「東屋」「浮舟」「夢浮橋」の一〇の巻々が存するらしく、「源氏物語」の後半部に集中している。なお同巻のツレは川崎市市民ミュージアム所蔵の古筆手鑑「披香殿」に存する。
【備考】

九六　伝庭田雅秀（にわたまさひで）筆　未詳歌集断簡

【書写年代】江戸時代前期
【極札】「庭田雅秀卿（ありつる）（「堯倫」・黒方印）」（奥西宗円）
【書誌】楮紙墨書　縦三二・〇×横一六・四cm。字高、約二九・七cm。
【本文】
遠帰鴈　藤孝
立〈帰〉（らん歟）るつはさは見えて天雲のよそに消行鴈の一こゑ
山花　紹巴
九重のうちは心も散花になかめ入ぬる山のしつけさ（四の句平懐いかゝときこえ候）
【出典】未詳歌集
【備考】極札の書き出しと断簡本文、不一致。

九七　寿慶筆（じゅけい）『老葉』注断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「いとあそふ　連哥師壽慶（「長好」・黒楕円印）」（藤井常智）

【書誌】斐楮交漉紙墨書　縦二〇・〇×横一五・〇cm。字高、約一五・九cm。

【本文】

いとあそふ空もみとりの柳かな
春雨をあはをによれる柳かな
春月を
はらふへき風たにかすむ月夜かな
かすむ夜そおほろけならぬ春の月
太田備中入道のやとりにて
心敬僧都なと侍し千句に
とをくみてゆけはかすまぬ春野かな
鎌倉にて二月のはしめに
まゆにほふ遠山青し春のうみ

（極札貼付）

【出典】『老葉』第十・発句。「いとあそふ」（一五七八）、「春雨を」（一五七九）、「はらふへき」（一五八一）、「かすむ夜そ」（一五八二）、「とをくみて」（一五八三）、「まゆにほふ」（一五八四）。

【備考】合点・書き入れあり。

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

九八　伝周桂（しゅうけい）筆『老葉』注断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「連哥師周桂（かすみの）（「重」・黒方印）」（古筆了雪）
「連歌師周桂（かすみの庭の）（「牛菴」・朱瓢型印）」（二代畠山牛庵）

【書誌】斐紙墨書　縦一六・一×横一二・四cm。字高、約一三・七cm。

【本文】

かすみの庭の暮のしつけさ
雨はれて遠山のこる窓のまへ
雨後の景気みる様にもこそ侍れ
さひしきもうきも心に草の鷹
あはれとをきけあかつきの雨
さひしと聞も又哀と聞も人のこゝろに
よるへきにや哀とは面白く聞と云心にや
しのひ音もらせ山ほとゝきす
たれきかん夕の雨の草のいほ
草鷹の雨たれきかん時鳥しのひ音を

【出典】宗祇の連歌集『老葉』の注釈書。

九九　伝宗硯筆（そうせき）『月村抜句』断簡

【書写年代】室町時代後期

【極札】「宗祇門人宗硯風をのみ（「牛菴」・朱瓢型印）」（二代畠山牛庵）

【書誌】斐紙（藍打曇）墨書　縦一七・四×横一八・六cm。字高、約一七・二cm。

【本文】

賤何人連歌

風をのみ春の
桜のゆくゑ哉　宗碩

夕日の庭に
蝶のとふかけ　真宗

ひはり鳴野へは
そとものしつかにて　宗哲

【出典】『月村抜句』永正十三年発句・一〇

一〇〇　伝宗椿筆（そうちん）『源氏物語』和歌抄出断簡

【書写年代】室町時代

【極札】「堺連哥師宗椿なかたえは（「箕山」・黒方印）」（藤本了因）

【書誌】斐紙墨書　縦一五・二×横一六・九cm。字高、約一三・七cm。

【本文】

〳〵なかたえはかことやおふとあやうさに
はなたの帯はとりてたにみすとて
やり給立帰　頭中将
〳〵君にかく引とられぬるおひなれは
かくてたえぬる中とこたへむえの
かれさせ給はしとあり
〳〵わりなき御心には御興のうちも
思やられていと丶及なき心ちし
給にそ丶ろはしきまてなむ

【出典】『源氏物語』「紅葉賀」巻和歌抄出。

【備考】「なかたえは」の和歌は光源氏、「君にかく」の和歌は頭中将の詠歌。古筆了仲著『古筆切名物』の宗椿項に「六半　源氏注」とあるが、同一かは不審。

一〇一　伝宗養（そうよう）筆　短冊

【書写年代】室町時代

【極札】「連哥師宗養冬も咲有題（「極」・黒方印）」（初代川勝宗久）

【書誌】斐紙墨書　縦三三・九×横五・三cm。字高、約三〇・六cm。

【本文】

敦賀御影堂にて　冬も咲種は心の蓮哉　宗養

越前之南陽寺にて　雪に鐘曙たとる夕哉　同

【出典】『宗養法師発句帳』冬・「冬も咲」四八〇、「雪に鐘」五三四

一〇二　伝梅軒宗句（ばいけんそうく）筆　未詳歌集断簡

【書写年代】安土桃山時代

【極札】「梅軒宗句あらき浪（「守村」・黒方印）」（古筆別家三代了仲）

【書誌】斐紙墨書　縦二九・〇×横八・二cm。字高、約二四・七cm。

【本文】

寄舟恋

あらき浪へたつる我のよるへなき身はうき舟のうらみてそふる

寄筏こ

こえかたき恋の山ちや世をうみにいかたうかふなためし成らん

【出典】未詳歌集

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

一〇三　伝猪苗代兼与筆　短冊

【書写年代】江戸時代前期

【極札】「稲苗代兼与朝にも有名（「極」・黒方印）」（初代川勝宗久）

【書誌】斐紙（天紫藍地藍紫打曇金霞、雁・笹金下絵）墨書　縦二六・四×横五・六cm。字高、約二五・四cm。

【本文】

はつ雪のあした
於愛宕
勝地院御　　朝にも今朝やはしめてみねの雪　兼与
所望

【出典】未詳歌

一〇四　伝北野松梅院筆　短冊

【書写年代】安土桃山時代末期

【極札】「北野松梅院上とめて（※印文不読・黒方印）」（二代朝倉茂入）

【書誌】斐紙（天紫藍地藍紫打曇金霞）墨書　縦二六・三×横五・八cm。字高、約二四・七cm。

【本文】

上とめて水を隔る氷哉　　禅昌

【出典】未詳歌

一〇五　伝秋葉工庵筆（あきばこうあん）『古今和歌集』断簡

【書写年代】安土桃山時代

【極札】「秋庭工庵（恋すれは）（※印文不読・黒方印）」（二代朝倉茂入）

【書誌】斐紙墨書　縦二四・五×横一七・五cm。字高、約二〇・九cm。

【本文】

恋すれは我身はかけとなりにけり
　さりとて人にそはぬものゆへ
かゝり火にあらぬ我身のなそもかく
　涙の川にうきてもゆらむ
かゝり火の影となる身のわひしきは
　流てしたにもゆるなりけり
はやき瀬にみるめおひせは我袖の
　涙の川にうきてもゆらむ
おきへにもよらぬ玉もの浪のうへに
　みたれてのみや恋わたりなむ

【出典】『古今和歌集』巻第十一・恋歌一・五二八～五三二

【備考】極札の「秋庭」は「秋葉」の誤りか。

早稲田大学図書館所蔵　佐佐木忠慧旧蔵　古筆手鑑『秋蛇藏』・所収断簡の書誌情報、及び考証

［付記］資料の撮影・調査・翻刻のご許可をくださった早稲田大学図書館、ご教示を賜りました各位に厚く御礼申し上げます。

（たきやま　あらし　早稲田大学高等学院・海城中学高等学校　国語科非常勤講師、
総合研究大学院大学　文化科学研究科　日本文学研究専攻　博士後期課程）